

千葉県八千代市

# 内野南遺跡 i 地点発掘調査報告書

—宅地造成に伴う埋蔵文化財調査—

2017

三信住建株式会社  
八千代市教育委員会  
株式会社地域文化財研究所

## 例 言

1. 本書は宅地造成に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施された、内野南遺跡 i 地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は三信住建株式会社より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が八千代市教育委員会の指導の下に行った。
3. 遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記の通りである。

所在地 千葉県八千代市吉橋字内野 1063-3 他

面積 1,070㎡

調査期間 平成 29 (2017) 年 2 月 20 日～4 月 6 日

調査担当者 大橋 生

調査参加者 [発掘調査] 泉 祐司 今野秀樹 小野裕司 峯 豊 小玉富夫 齋藤 稔  
佐藤敬一郎 田中成光 古里兼吉 横 勝雄 宮内 孝 深山恒男 山本清二  
[整理調査] 川村理華 木村春代 小林真千子 野村浩史 藤井陽子 増田香理

4. 整理調査及び本書の作成は株式会社地域文化財研究所において大橋が担当した。
5. 執筆分担は第 1 章第 1 節が八千代市教育委員会、その他が大橋である。  
出土遺物については齋藤弘道氏に御教示いただいた。
6. 調査記録及び出土品は、一括して八千代市教育委員会が保管・管理している。
7. 調査においては下記の方々にご指導・ご協力を賜った(順不同・敬称略)。

三信住建株式会社 八千代市教育委員会 教育総務課 文化財班  
足立洋一 金子亮介 齋藤弘道

## 凡 例

1. 遺構図は国家標準直角座標Ⅹ系(世界測地系)を基準に作成し、方位は座標北を示す。
2. 遺構等は以下の略号で示した。  
竪穴住居跡:SI 土坑:SK ビット:P 攪乱:K
3. 遺構図における土層説明で、微・少・中・多量は土層内における含有物の割合を 4 区分したものであり、それぞれ、微量は 1～5% 未満、少量は 5% 以上～15% 未満、中量は 15% 以上～30% 未満、多量は 30% 以上を示す。粒は 20mm 未満、ブロックは 20mm 以上を示す。
4. 遺構・遺物の色調表記は『新版標準土色帖 2003 年版(財団法人日本色彩研究所ほか)』を使用した。
5. 本文中の遺物出土点数は、未接合でも同一個体と判断される場合、点数は 1 つとした。
6. 文章及び出土遺物観察表の計測値は( )が復元値、〈 〉が残存値を示す。単位は cm 及び g である。
7. 遺物写真図版は原則として 1/3 とした。
8. 遺物番号は本文、挿図、写真図版共に一致している。
9. 遺構実測図・遺物実測図中の網掛けおよび土器類記号は下記のとおりである。

焼土



繊維



10. 遺構図中の●は土器、○は土製品、▲は石器・石製品を表す。

# 目次

## 例言 凡例 目次

### 第1章 調査経過と遺跡の立地環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査方法と調査経過	2
第3節 基本土層	2
第4節 遺跡の位置と環境	3

第2節 堅穴住居跡	11
第3節 土坑	26
第4節 ビット	31
第5節 遺構外出土遺物	32

### 第2章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要	11
-----------	----

第3章 まとめ	33
---------	----

写真図版 報告書抄録

## 挿図目次

第1図 確認調査者トレンチ配置図	1
第2図 基本堆積土層図	2
第3図 周辺遺跡分布図	3
第4図 調査範囲及び既往の調査地点	4
第5図 調査区全体図	6
第6図 4区全体図	7
第7図 5区全体図	8
第8図 6区全体図	9
第9図 7区全体図	10
第10図 SII・SI2①	12
第11図 SII・SI2②	13
第12図 SI1出土遺物	13
第13図 SI2出土遺物	14
第14図 SI3	15
第15図 SI3出土遺物	16
第16図 SI4	18

第17図 SI4出土遺物	18
第18図 SI5①	19
第19図 SI5②	20
第20図 SI5出土遺物①	21
第21図 SI5出土遺物②	22
第22図 SI6・SI7	24
第23図 SI6出土遺物	24
第24図 SI7出土遺物	25
第25図 SK1・2・3・4	27
第26図 SK5・6・7・8・9・SK9出土遺物	29
第27図 SK10・11・12・13	30
第28図 P05出土遺物	31
第29図 遺構外出土遺物	32
第30図 縄文時代陥し穴分布図	34
第31図 縄文時代前期中葉～後葉遺構分布図	35

## 表目次

第1表 内野南遺跡調査一覧表	4
第2表 SII出土遺物観察表	13
第3表 SI2出土遺物観察表	14
第4表 SI3出土遺物観察表	17
第5表 SI4出土遺物観察表	18
第6表 SI5出土遺物観察表	22

第7表 SI6出土遺物観察表	25
第8表 SI7出土遺物観察表	25
第9表 土坑出土遺物観察表	28
第10表 ビット出土遺物観察表	31
第11表 ビット一覧表	31
第12表 遺構外出土遺物観察表	33

## 写真図版目次

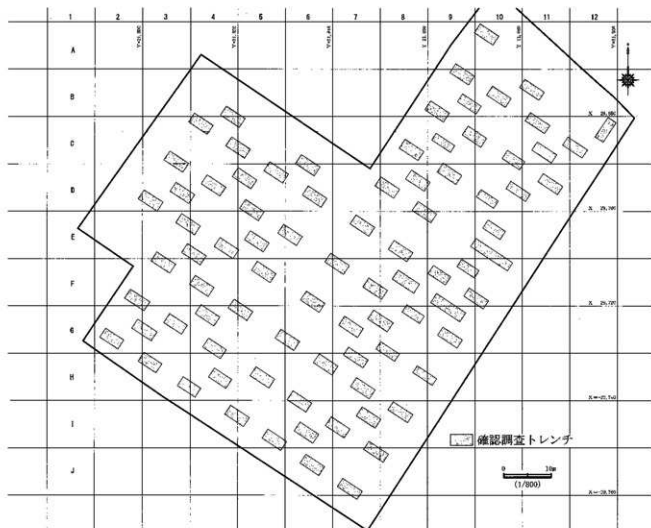
図版1 調査区全景/1区全景/2区全景/3区全景 4区全景
図版2 5区全景/6区全景/7区全景/SII上層断面 SI1遺物出土状況/SII全景/SII炉1全景/ SI1か2全景
図版3 SI2土層断面/SI2遺物出土状況/SI2全景 SI2炉全景/SI3土層断面/SI3遺物出土状況 SI3全景/SI3か1全景
図版4 SI4上層断面/SI4遺物出土状況/SI4全景 SI5土層断面/SI5遺物出土状況/SI5磨製石 斧出土状況/SI5-P16石製垂飾出土状況/SI5 全景

図版5 SI5炉1・2・3全景/SI5炉4・5全景/SI6土層 断面/SI6全景/SI6炉1全景/SI6炉2全景 SI7上層断面/SI7遺物出土状況
図版6 SI6・7全景/SK1全景/SK2全景/SK3全景 SK4全景/SK5全景/SK6全景/SK7全景
図版7 SI1・2・3①出土遺物
図版8 SI3②・4・5①出土遺物
図版9 SI5②出土遺物
図版10 SI5③・6出土遺物
図版11 SI7,SK9,P05,遺構外出土遺物

# 第1章 調査経過と遺跡の立地環境

## 第1節 調査に至る経緯

平成28年7月25日、三信住建株式会社代表取締役社長 信田博幸氏（以下、事業者）から「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会（以下、市教委）に提出された。市教委は現地踏査を行い、開発面積14,602.76㎡の内、6,720㎡が周知の埋蔵文化財包蔵地（内野南遺跡）に含まれると判断し、8月1日、その旨を事業者に回答した。回答後、事業者と協議を行い、遺跡の範囲、性格等を明らかにするための確認調査を実施するに至った。9月30日、事業者から文化財保護法93条の届出が提出され、市教委は準備が整った12月19日に確認調査を開始した。調査は、平成29年1月12日まで行い、縄文時代の堅穴建物跡7棟、土坑7基を検出し、協議範囲は1,070㎡となった。この結果を受け、市教委と事業者で協議が行われ、記録保存（発掘調査）の措置をとることになった。調査の実施については、事業者から株式会社地域文化財研究所が挙げられた。市教委は、同社から調査計画書・積算書の提出を求め、適正な調査実施が可能と判断した。平成29年2月17日、事業者、株式会社地域文化財研究所、市教委との間で発掘調査の実施に関する協定書を締結し、同日、市教委は、文化財保護法92条の届出を千葉県教育委員会に進達し、本調査実施に至った。



第1図 確認調査トレンチ配置図

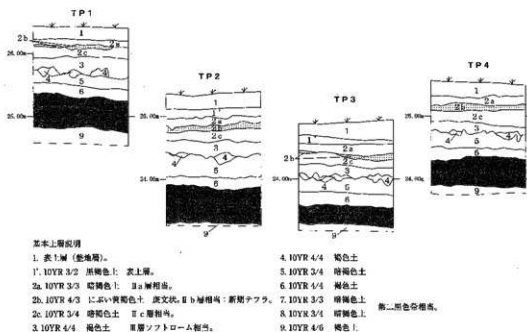
## 第2節 調査方法と調査経過

発掘調査は、平成29年2月20日から4月6日までの1ヵ月半にわたって実施した。確認調査で検出されている遺構を中心に、事業範囲内に7か所の調査区を設定し、北西側より1～7区として調査を実施した。2月20日から重機による表土掘削を開始、24日より遺構確認を行い、縄文時代前期黒浜式期を主とした竪穴住居跡7軒、土坑13基、ピット62基を検出した。28日からは各調査区ごとに各遺構の調査を開始し、3月には各遺構ごとに随時、写真撮影及び実測等の記録作業を進め、4月6日までは各調査区、各遺構の調査を終了した。

遺構覆土出土遺物については、原則として出土位置を3次元で記録している。また、遺構の実測については平面・土層断面共に縮尺1/20を原則とした。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ(1000万画素)を併用し、適宜、記録撮影を実施している。

## 第3節 基本土層

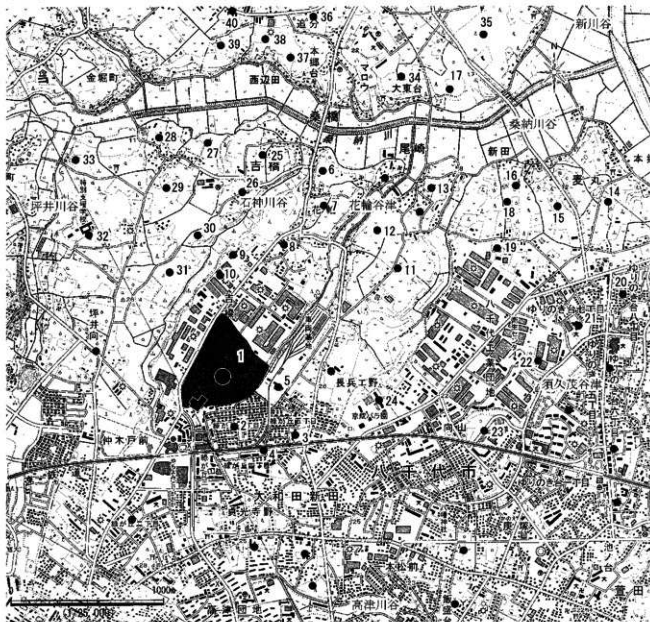
今回の調査地点は台地の縁辺部にあたり、北西から南東へ傾斜している。以前には工場として利用されており、南側は盛土がなされ整地されていた。基本土層の確認は、表土層も含め、斜面に直交するように土層の観察・記録を実施した。3区東壁、4区西壁、6区東壁、7区東壁で実施し、更に2.0m×2.0mのテストピットを掘り下げ、基本土層を観察・記録している。本跡では2b層=新期テフラ層が確認調査で検出されており、黒浜式期の各遺構はその新期テフラ層下位の2c層中より形成され、ローム層への掘り込みは浅い。そのため遺構確認面はローム層上面ではなく2c層中にて検出している。現地表より遺構確認面までは斜面上位で約0.5m、斜面下位では表土が除々に深さを増し、深い地点で最大1.5m程となる。各テストピットは立川ローム層第二黒色帯相当と考えられる層を掘り抜いた。現地表から9層上面までは1.5～2.0mを測る。旧石器時代の遺物は検出されなかった。



第2図 基本堆積土層図 (S=1/60)

#### 第4節 遺跡の位置と環境

八千代市は下総台地北西部に位置し、市域を占める台地には樹枝状に谷が入り込み複雑な地形を形成している。本跡は、印旛沼へと続く新川の支流桑納川より更に分かれる石神川と花輪川により形成された石神川谷と花輪谷津に挟まれた半島状の舌状台地の最奥部に立地している。その範囲は広く、東西約370m、南北約360mに及ぶ。そのうち、今回のi地点は花輪谷津側に面した縁辺部に標高25



- |              |            |             |             |
|--------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 内野南遺跡     | 11. 古橋芝山遺跡 | 21. ヲサル山遺跡  | 31. 西芝山南遺跡  |
| 2. 仲ノ台遺跡     | 12. 平作遺跡   | 22. ヲサル山南遺跡 | 32. 八千子台遺跡  |
| 3. ツイノ作遺跡    | 13. 勘子山遺跡  | 23. 向山遺跡    | 33. 川向遺跡    |
| 4. ツイノ作南遺跡   | 14. 麦丸遺跡   | 24. 長兵衛野南遺跡 | 34. 大東台遺跡   |
| 5. 大和田新田芝山遺跡 | 15. 水神遺跡   | 25. 吉野部幾遺跡  | 35. 桑納遺跡    |
| 6. 妙見前遺跡     | 16. 新田遺跡   | 26. 古橋新山遺跡  | 36. 追分遺跡    |
| 7. 浜内遺跡      | 17. 桑橋新田遺跡 | 27. 大作遺跡    | 37. 本郷台遺跡   |
| 8. 内野遺跡      | 18. 新田台遺跡  | 28. 背戸遺跡    | 38. サゴテ遺跡   |
| 9. 西内野遺跡     | 19. 麦丸台遺跡  | 29. 東向遺跡    | 39. 瓜作遺跡    |
| 10. 西内野南遺跡   | 20. 権現後遺跡  | 30. 西芝山遺跡   | 40. 金網台貝塚遺跡 |

第3図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第4図 調査範囲及び既往の調査地点 (S=1/5,000)

第1表 内野南遺跡調査一覧表

遺跡名・地点名	文献	主な遺構・遺物
a地点 2000	『千葉県八千代市内野南遺跡a地点発掘調査報告書』 八千代市教育委員会	貯穴B(縄文時代早期)・I貯穴(縄文時代早～前期)、縄文土器(繩溝布式・下式・木山式・黒 灰式・厚底式・加古野式・加曾野式)、縄文時代石器(厚石・石錐・磨石・網刀)、後、焼火 土灰跡1(奈良時代)、土師器・灰層跡(奈良時代)
b地点 1999	『千葉県八千代市内野南遺跡発掘調査報告書 平成10年度』 内野南遺跡b地点 八千代市教育委員会	陥し穴・土坑1(縄文時代)、縄文土器(早期・中期・後期)
c地点 2004	『千葉県八千代市内野南遺跡c地点発掘調査報告書 平成15年度』 内野南遺跡c地点 八千代市教育委員会	陥し穴5・土坑2(縄文時代)、縄文土器(早期・中期・後期)、縄文時代石器(石錐・網刀)
d地点 2008	『千葉県八千代市内野南遺跡d地点発掘調査報告書 —集約住宅建設に伴う遺構文化財調査—』 八千代市教育委員会・若原昌孝	陥し穴4層跡2(縄文時代中期後半3・前期前半3)、前期後半3①、貯穴5(縄文時代早期後半)・ピット 1R2(縄文時代早期後半12・前期前半2・前期後半17)、陥し穴1(縄文時代)、遺跡跡面跡1(黒 灰式跡)、縄文土器(繩溝布式・字山上層式・黒灰式・厚底式・具座式・溝掘り式・前期木葉一 中層前・加曾野E式・加曾野H式・曾谷式・後期加曾野式・後期加曾野式)、土師製瓦葺り土、縄 文時代小石(磨石・磨石)
e地点 2012	『千葉県八千代市内野南遺跡発掘調査報告書 平成23年度』 内野南遺跡c地点 八千代市教育委員会	遺構なし、縄文土器(後・後期)
f地点 2014	『千葉県八千代市内野南遺跡発掘調査報告書 平成25年度』 内野南遺跡f地点 八千代市教育委員会	遺構なし、縄文土器(加曾野B式・安行1式)、縄文時代石器(網刀)、黒漆
g地点 2014	『千葉県八千代市内野南遺跡発掘調査報告書 平成25年度』 内野南遺跡g地点 八千代市教育委員会	遺構なし、後継(縄文時代)、土師器(奈良・平安時代)
h地点 2017	『千葉県八千代市内野南遺跡発掘調査報告書 平成28年度』 内野南遺跡h地点 八千代市教育委員会	遺構なし、縄文土器(後期)
I地点 — 本地点		貯穴片層跡7(黒灰式・溝掘り(古)式跡)、陥し穴7(縄文時代)、土坑9(縄文時代前期)、ピット 6②(縄文時代前期)、縄文土器(黒灰式・溝掘り(古)式・溝掘り(新)一層式c(新)式・後期)、縄文 時代石器(打製石斧・磨製石斧・磨石・磨石・石錐・厚石・網刀)、石製土器(土師)

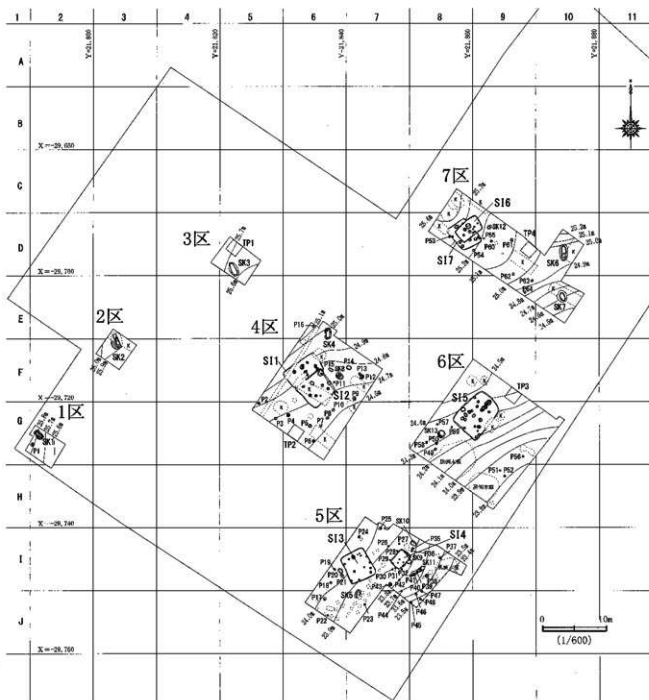
～26 mに位置し、支谷との比高差は約12～13 mを測る。これらの台地上には今回の調査に係わる縄文時代前期中葉黒浜式期の長期にわたる集落を確認している西八千代遺跡群をはじめ、他にも各時代の重要な遺跡が数多く点在している。以下では本地点の時期である縄文時代前期中葉黒浜式期を中心に周辺遺跡を概観する。

本跡と同じ台地上には、縄文時代早期・後期の土器が出土している淡内遺跡(7)、前期中葉黒浜式、中期阿玉台式・加曾利E式、後期安行式土器が出土した妙見前遺跡(6)、陥し穴群、土坑群が検出され、中期阿玉台式土器を主とし、他に早期田戸下層式、前期浮島・興津式、中期五領ヶ台式、後期安行1式、晩期安行式土器が出土した西内野遺跡(9)などが確認されている。また、本跡を含む花輪谷津の最奥部には谷の先端部を取り囲むように近接して、内野南遺跡(1)、伸ノ台遺跡(2)、ライノ作遺跡(3)、ライノ作南遺跡(4)、大和田新田芝山遺跡(5)がある。いずれも前期を主体としている。内野南遺跡(1)では本地点も含め、陥し穴14基、早期後半の炉穴10基、黒浜式期住居跡8軒と詳細は後述するが早期後半から晩期までの各時期の遺物が出上している。伸ノ台遺跡(2)では陥し穴21基、黒浜式期住居跡10軒、浮島式期の小堅穴状遺構1基と関山式・黒浜式・浮島式・興津式・諸磯式土器が検出されている。ライノ作遺跡(3)では陥し穴3基、早期の炉穴5基、黒浜式期住居跡1軒、加曾利B式期住居跡1軒と茅山式・花積下層式・関山式・黒浜式・浮島式・興津式・諸磯式・加曾利B式土器が検出されている。ライノ作南遺跡(4)では陥し穴18基、早期の炉穴3基、黒浜式期住居跡24軒と茅山式・関山式・黒浜式・浮島式・諸磯式・五領ヶ台式・阿玉台式・加曾利E式・加曾利B式土器が検出され、また、マガキを主体とした前期の地点貝層が検出されている。大和田新田芝山遺跡(5)では陥し穴49基、早期の炉穴3基、黒浜式期住居跡3軒、加曾利B式期住居跡1軒と条痕文系・黒浜式・浮島式・興津式・五領ヶ台式・阿玉台式・加曾利E式・加曾利B式土器が検出されたほか、アサリやハイガイなどの前期の地点貝層が検出されている。以上の花輪谷津の最奥部の5遺跡から当地域の歴史的変遷を追うと早期の炉穴21基や早期以降の多時期のものが含まれるとみられるが陥し穴105基がこれまでに確認されており、縄文時代早期後半から主に狩猟場とされていた状況が窺える。前期では花積下層・関山式期の痕跡は少ないが、黒浜式期以降、人口増大に伴い集落が増加傾向を示す古奥東京湾岸の状況に重なるように、黒浜式期の住居跡は総数46軒が確認されている。その後、前期後半には衰退し、中期の痕跡は更に少なく土器が認められる程度で、そして後期加曾利B式期には住居がわずかに確認されている。更に時期を経て平安時代の住居跡6軒も検出されている。伸ノ台遺跡(2)、ライノ作遺跡(3)、ライノ作南遺跡(4)は300 m程の範囲に近接して存在し、3遺跡の黒浜式期住居跡35軒は、該期の中心的な性格を有していたものとみられる。やや離れるが同じ谷沿いとなる内野南遺跡(1)、大和田新田芝山遺跡(5)も有機的な関連性が想定される。市内には他にも本跡より南東へ約3.8kmの大留入遺跡では黒浜～諸磯式期の陥し穴4基、本跡より東へ約5kmの新林遺跡では浮島・興津式期の土坑41基、二重堀遺跡では浮島・興津式期の堅穴状遺構1基、土坑37基、本跡より北東へ約5kmの瓜ヶ作遺跡では黒浜～興津式期の住居跡17軒が確認されている。古奥東京湾岸の前期黒浜式期の人口増加に付随する状況が窺える。

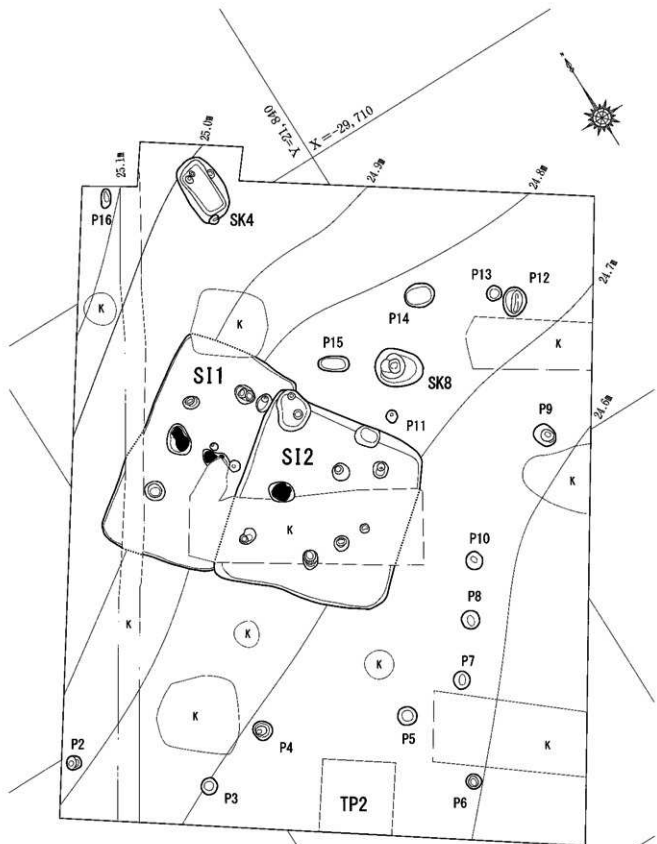
内野南遺跡は市域の南西部に位置し、今回の調査は八千代市吉橋字内野1063-3他に所在するi地点となる。内野南遺跡も今回も含めこれまでに9ヵ所の調査が実施されている。既往の調査地点については第1表に整理した。内野南遺跡は縄文時代早期後半～前期を主とし、未調査部分も多いが広い遺跡範囲に比して遺構の分布密度はやや希薄である。主な遺構としては、a,d地点で早期の炉穴が計



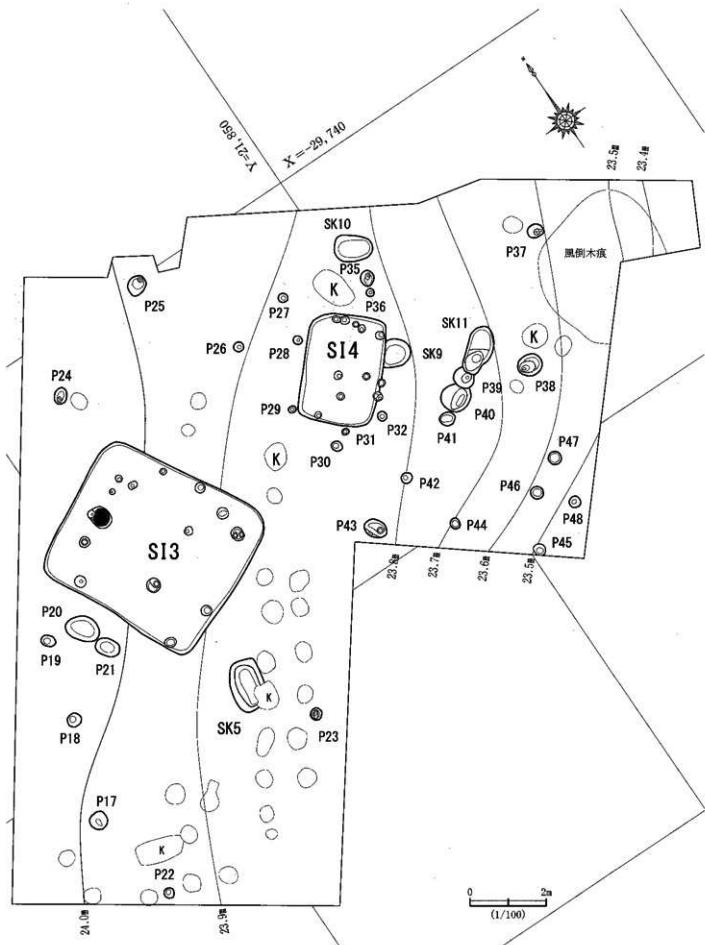
10基、b・c・d・i地点で計14基の陥し穴が検出されている。d地点では茅山上層式期の住居跡3軒、黒浜式期の住居跡1軒、浮島Ⅲ式期の住居跡2軒、興津Ⅰ式期の住居跡2軒で計8軒の住居跡と黒浜式期の道路状遺構が検出されている。出土遺物としては縄文土器が早期稲荷台式・三戸式・茅山式、前期黒浜式・浮島式・興津式・諸磯式、中期加曾利E式、後期加曾利B式・曾谷式・安行式、晚期安行式までみられる。他に石器も敲石・磨石・石皿・石鏃・打製石斧・磨製石斧などが出土し、またd地点では「下堤型」の土製球状耳飾も出土している。縄文時代以外にはa地点で奈良時代のコーナーカマドを有した竪穴住居跡が1軒検出されている。本跡周辺の石神川や花輪川は新川谷より古印旛湾へ注いでいたが、現在、新川は東京湾へと放水されており、本跡より東京湾までは直線で約10kmである。縄文海進期では古奥東京湾までは更に距離は縮まっていたと想定される。



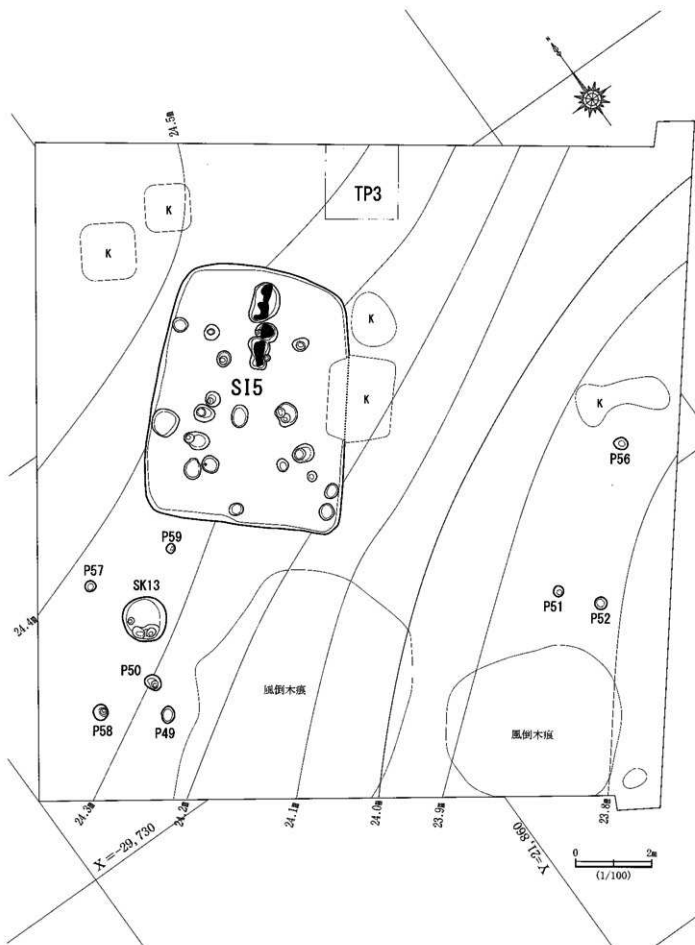
第5図 調査区全体図



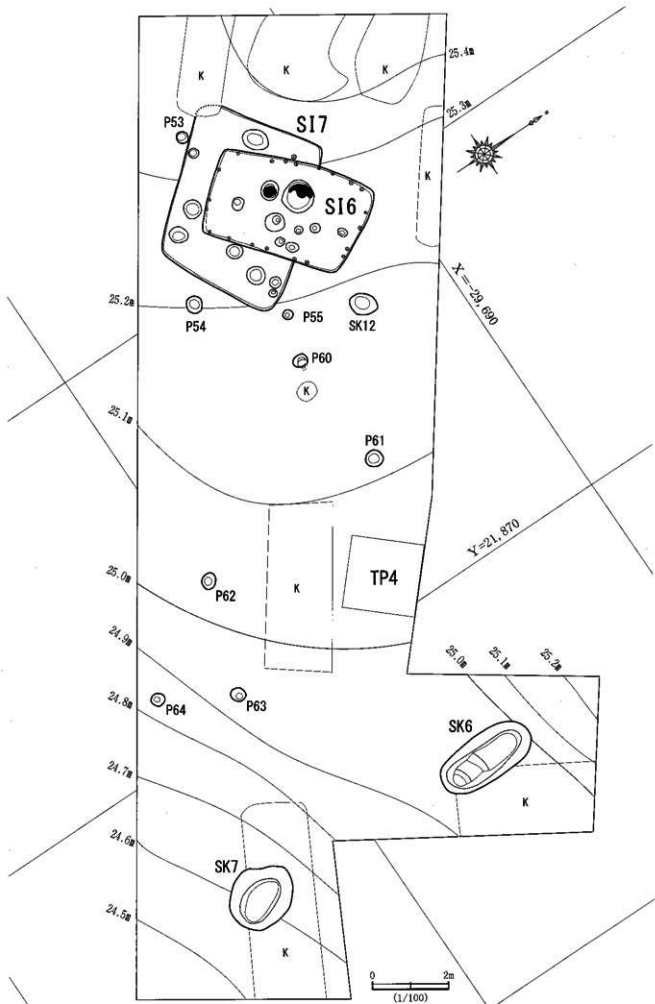
第6图 4区全体图



第7图 5区全体图



第8图 6区全体图



第9图 7区全体图

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は竪穴住居跡7軒、土坑13基、ピット62基である。遺物は主に縄文時代前期中葉黒浜式期の土器と石器・石製品が出土した。収納箱で5箱（整理箱容量：縦54cm×横34cm×深さ15cm）である。総点数で1,280点、総重量で32,105gである。その多くが住居に伴う遺物である。調査対象範囲は1,070㎡で、前述のように調査区は1～7区の7ヵ所に分かれている。調査区は北西から南東へ傾斜しており、現地表から遺構確認面までの深さは0.5～1.5m程で、斜面という地形上、表土は下位へ行くにつれ深度を増す。各遺構は前述のように2c層中、ローム層より上層にて検出している。工場として利用され、整地もおこなわれていたために検出された遺構は攪乱を受けた部分がみられる。周辺では奈良・平安時代の竪穴住居跡も散見されているが、今回は遺物も含め、その痕跡は検出されなかった。

### 第2節 竪穴住居跡

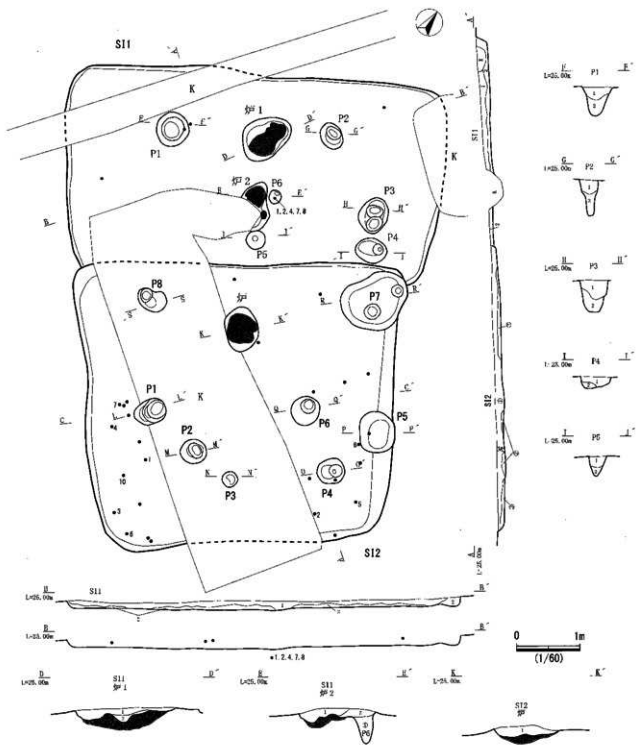
S11（第10・11・12図、第2表、図版2・7）

【位置】4区F-6グリッドに位置する。南半をS12に壊されている。【形態・規模】一部が攪乱を受け失われている。残存する掘り込みも浅く、上部も削平されているとみられる。平面形状はやや歪な長方形を呈すると想定される。規模は、残存値で南北軸で3.1m、東西軸で5.9mを測る。

【覆土】前述のように覆土は浅く含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土と褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約15cmを測る。【床面・壁】床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。【ピット】P1～6のピット6基が検出されている。P1は最大径54cm・深さ45cm、P2は最大径43cm・深さ57cm、P3は最大径57cm・深さ50cm、P4は最大径52cm・深さ18cm、P5は最大径29cm・深さ31cm、P6は最大径22cm・深さ22cmを測る。P1～3は形状・規模より柱穴と想定されるが配置に規則性は見出せない。P5・P6はP2に近接しており関連性が窺える。【炉】東西軸の中心に沿って2基を検出した。P1の平面形状は楕円形で最大径84cm・深さ10cmを測り、よく被熱した火床面を残す。P2は南側に攪乱を受けており失われている。平面形状は楕円形とみられ、最大径85cm・深さ10cmを測り、よく被熱した火床面を残す。前述のようにP5・P6が近接しており、炉に関連するピットとみられる。【遺物】覆土中より出土した遺物は総点数で60点（うち石器1点）、総重量で2,575gで少なく、いずれも細片である。そのうち縄文土器8点、磨石1点を図示した。縄文土器の全ての胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断される。2の施文時の粘土隆起や4の追加成形がみられ、占相を示している。遺物の平面分布は炉周辺にやや多いように見受けられる。また、P6より出土した遺物が多く、1・2・4・7・8が含まれる。【所見】本遺構は、重複関係からS12より古く、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式古～中段階の所産と考えられる。

S12（第10・11・13図、第3表、図版3・7）

【位置】4区F-6グリッドに位置する。北側でS11を壊し構築されている。【形態・規模】一部が攪乱を受け失われている。残存する掘り込みも浅く、上部も削平されているとみられる。平面形状はやや歪な正方形を呈す。規模は、南北軸で4.9m、東西軸で5.3mを測る。炉の位置より、南側が出入り口である可能性が高い。【覆土】覆土は浅く含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土とに



#### S11土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR4/6 褐色土 褐色土混入、粘性もち、やや締まる。

#### S11-P1-S1土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、粘性もち、やや締まり欠く。
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック中量、粘性もち、締まり欠く。

#### S11-第1土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地上粒・塊土ブロック中量、粘性もち、締まる。
2. 10YR1/3 に近い黄褐色土 粘土粒多量、粘性もち、締まる。
3. 25YR5/4 に近い赤褐色土 焼土主体、よく焼熟している。(火灰)

#### S11-第2土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒中量、粘性欠き、締まる。
2. 10YR4/6 暗褐色土 焼土粒少量、粘性欠き、締まる。
3. 25YR5/4 に近い赤褐色土 焼土主体、よく焼熟している。(火灰)

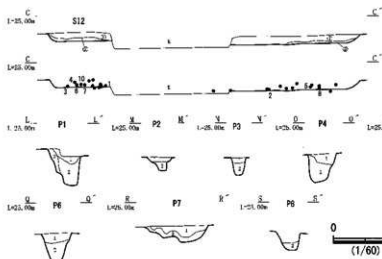
#### S11-P6土層説明

0. 10YR4/3 に近い黄褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まり欠く。

#### S12-土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック多量、粘性欠き、締まる。
2. 25YR5/4 に近い赤褐色土 焼土主体、よく焼熟している。(火灰)

第10図 S11・S12①



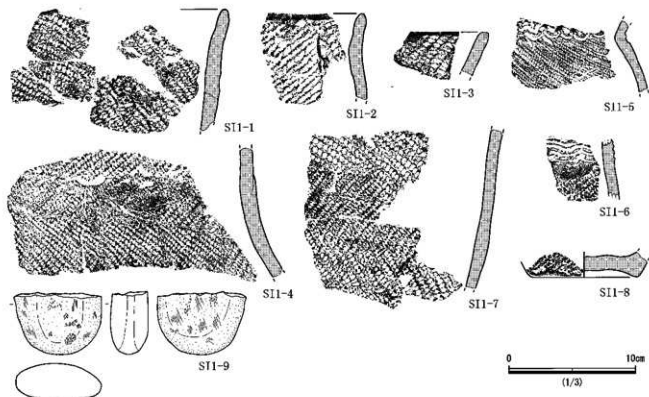
第11図 S11・S12②

S12上層説明

- ① 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック散見。粘性もろ、締まる。
- ② 10YR3/3 に近い黄褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。粘性もろ、やや締まる。

S12-P1~8土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック・塊土粒散見。粘性もろ、締まる。
2. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量。粘性もろ、やや締まり欠く。
3. 10YR1/1 黄褐色土 ローム土主体。粘性もろ、締まる。



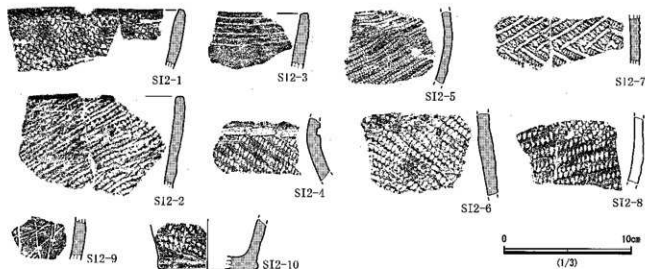
第12図 S11出土遺物

第2表 S11出土遺物観察表

遺物 No.	種別	図種・口徑	高さ	底径	文様	色相(外壁・内面)	胎土	焼成	備考		
1	縄文土器	深鉢	—	(9.5)	—	1 緑帯片、草部1段縄文を底文、内面は横方向の割いずら。 2 5YR6/4C 2段1横帯、 2.5YR6/6横	緑帯、白色粘	普通	黒灰式		
2	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	1 緑帯片、ゆがみ状口縁、無帯2段縄文、無文時の斜 3YR6/6横 2 5YR6/3C 2段1横	緑帯、白色粘、透明粒	普通	黒灰式		
3	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	—	口縁部片、草部1段縄文を底文、内面は横方向のしがき。 5YR6/6横 5YR6/6横	緑帯、白色粘	普通	黒灰式	
S11	4	縄文土器	深鉢	—	(10.2)	—	—	割部片、草部1段縄文を底文、追加成形。 2.5YR6/4横 2.5YR6/7横	緑帯、白色粘、透明粒	普通	黒灰式
	5	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	—	浅帯片、草部1段縄文を底文、2段1対の斜文1主帯文。 2.5YR6/4横 2.5YR6/4横	緑帯、砂粒多	やや良釘	黒灰式
	6	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	—	割部片、斜文、草部1段縄文を底文。 5YR6/9明帯片 1.5YR3/3C 2段1横	緑帯、砂粒少	普通	黒灰式
	7	縄文土器	深鉢	—	(12.5)	—	—	割部片、羽状縄文の草部1段縄文と草部1段縄文を底文。 2.5YR6/4横 2.5YR6/4横	緑帯、白色粘	普通	黒灰式
8	縄文土器	深鉢	—	(2.0)	8.0	—	—	底部片、草部1段縄文を底文、底面上げ部で丁寧なずら。 2.5YR6/4横 2.5YR6/4横	緑帯、砂粒少	普通	黒灰式
9	石輪	炉石	—	—	—	—	—	長さ:5.0、幅:6.9、厚さ:2.9、高さ:145.6g、石材:石灰質粘 50%存、表面はよく使用されている。			

●●●●●





第13図 S12出土遺物

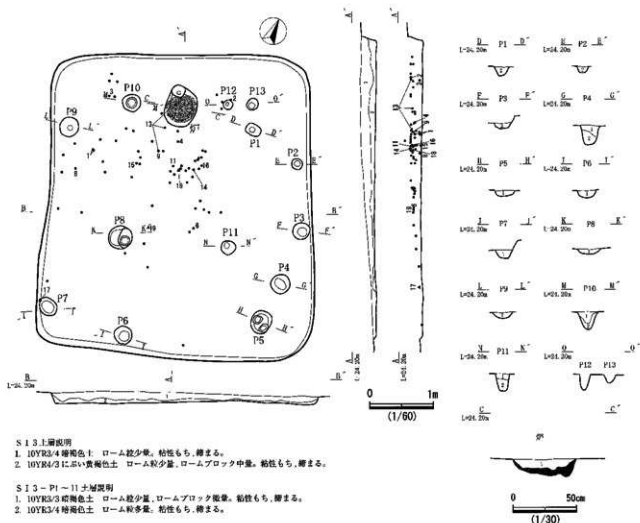
第3表 S12出土遺物観察表

遺物 №	種類	形状	口径	断面	直径	文様	色調(外面/内面)	胎土	備註	備考
1	縄文土器	深鉢	—	<4.6>	—	口縁部片。草部は縄文を施文。	7.SYR1/2(灰褐色)	縹色、白色粒	普通	黒浜式
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。	7.SYR4/4(白)			
						口縁部片。白漆塗下に半截竹管による押引文が横走する。器底の痕跡が等しい。	7.SYR4/4(縹)			
3	縄文土器	深鉢	—	<4.4>	—	口縁部片。白漆塗下に半截竹管による押引文が横走する。器底の痕跡が等しい。	7.SYR5/6(縹褐色)	縹色、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR5/3(縹)			
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR5/3(縹)			
SI2	縄文土器	深鉢	—	<4.9>	—	口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/6(縹)	縹色、白色粒	普通	黒浜式
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/4(白)			
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/4(白)			
6	縄文土器	深鉢	—	<6.5>	—	口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	5YR5/6(縹)	縹色、白色粒	普通	黒浜式
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/4(白)			
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/4(白)			
7	縄文土器	深鉢	—	<3.9>	—	口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	10YR5/4(白)	縹色、白色粒、砂粒	やや良好	黒浜式
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/4(白)			
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/4(白)			
8	縄文土器	深鉢	—	<5.3>	—	口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR6/4(白)	白色粒少、縹褐色粒	良好	—
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)			
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)			
9	縄文土器	深鉢	—	<3.4>	—	口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)	縹色、白色粒	普通	黒浜式
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)			
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)			
10	縄文土器	深鉢	—	<4.0>	(B) 胎土	口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)	縹色、白色粒	普通	黒浜式
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)			
						口縁部片。附加糸1根、附加2条を施文。内面は横方向の丁字ナゲ。	7.SYR7/4(白)			

ぶい黄褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約15cmを測る。【床面・壁】床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。【ピット】P1～8のピット8基が検出されている。P1・2・3・8は上部を攪乱により削平されている。P1は最大径51cm・深さ60cm、P2は最大径43cm・深さ22cm、P3は最大径25cm・深さ28cm、P4は最大径45cm・深さ44cm、P5は最大径65cm・深さ24cm、P6は最大径48cm・深さ45cm、P7は最大径105cm・深さ25cm、P8は最大径48cm・深さ30cmを測る。P1・4・6・8は形状・規模より柱穴と想定されるが配置に規則性は見出せない。P7は口径が開くが浅く、貯蔵穴の可能性もある。【炉】中心より北寄りに1基を検出した。炉の平面形状は楕円形で最大径71cm・深さ10cmを測り、よく被熱した火床面を残す。【遺物】覆土中より出土した遺物は総点数で83点、総重量で2,080gと少なく、石器は出土していない。土器はいずれも細片である。そのうち縄文土器10点を図示した。縄文土器のほぼ全てが胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断され、S I Iより新相とみられる。2・5・7では附加糸縄文、9では格子目文がみられ、8は胎土に繊維が含まれず「釈迦堂Z3式」に類するような異系統土器であろうか。「釈迦堂Z3式」の特徴はみられず、胎土は赤褐色粒が目立ち雲母は含まれていない。器壁は薄くはないが堅緻で外面は単節縄文が施文される。内面に指頭圧痕はなく、丁寧な横ナゲが施される。出土位置は床面に近く、混入遺物とはみられない。遺物の平面分布は南半側に多いように見受けられる。【所見】本遺構は、重複関係からもS I Iより新しく、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。

S13 (第14・15図、第4表、図版3・7・8)

【位置】5区I-7グリッドに位置する。【形態・規模】遺存状況は比較的良好であるが、南側やや上部を削平されているとみられる。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で4.8m、東西軸で4.4mを測る。炉の位置より、南側が出入口である可能性が高い。【覆土】含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土とにぶい黄褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約25cmを測る。【床面・壁】床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。【ピット】P1～13のピット13基が床面より検出されている。P1は最大径23cm・深さ13cm、P2は最大径18cm・深さ8cm、P3は最大径26cm・深さ8cm、P4は最大径29cm・深さ30cm、P5は最大径38cm・深さ8cm、P6は最大径29cm・深さ10cm、P7は最大径33cm・深さ12cm、P8は最大径37cm・深さ8cm、P9は最大径30cm・深さ10cm、P10は最大径30cm・深さ27cm、P11は最大径23cm・深さ26cm、P12は最大径16cm・深さ28cm、P13は最大径20cm・深さ13cmを測る。P4・10・11・12は形状・規模より柱穴と想定されるが配置に規則性は見出せない。位置関係のみで判断すれば、P8・10・11・12が柱穴となるが浅い貧弱なピットが含まれる。【炉】中心より北寄りに1基を検出した。炉の平面形状は楕円形で最大径66cm・深さ8cmを測り、よく被熱した火床面を残す。また、径20cm、深さ53cm



S13 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒少量、ロームブロック中量、粘性もち、締まる。

S13-P1～13 土層説明

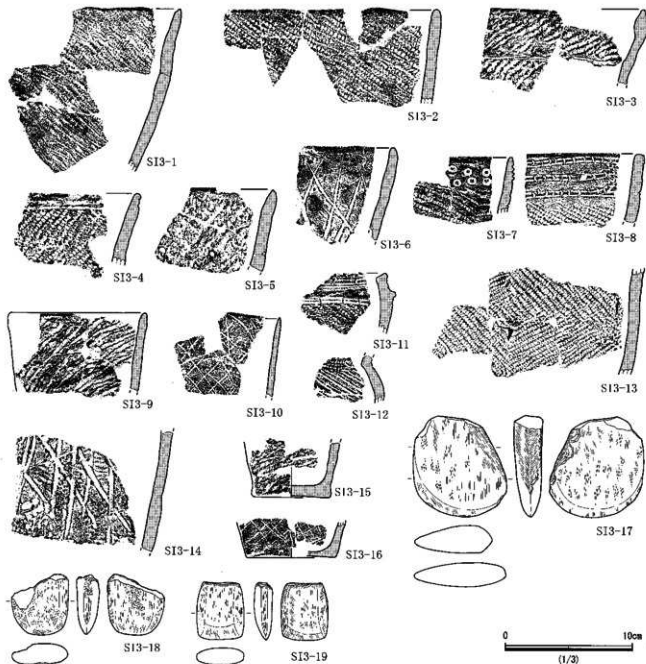
1. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量、粘性もち、締まる。

S13-炉 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 粘土粒中量、焼土ブロック微量、粘性もち、締まる。
2. 2.5YR5/4 にぶい赤褐色土 焼土主体、よく被熱している。(火床)

第14図 S13

の小ビットが伴う。〔遺物〕 覆土中より出土した遺物は総点数で330点（うち石器3点）、総重量で7,370gと比較的まとまった量が出土している。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器16点、石器3点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断される。1は結節回転文、2は附加条縄文、7は燃糸文、3・9・15が無節縄文、13では菱形構成の縄文と多様性に富む。6・10・14・16では沈線による格子目文がみられ、16は胴部の開き方により、鉢形土器の可能性が想定される。17・18・19はいずれも上端部を欠失している磨製石斧である。石材が乏しい状況であった古奥東京湾の同時期の遺跡と類するように石器は当地域でも貴重であり、大切に使用されていた状況が窺える。これら出土遺物はS I 1・2よりも新相を示している。遺物の平面分布は北側、炉周辺に多いように見受けられる。〔所見〕 本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。



第15図 S I 3出土遺物

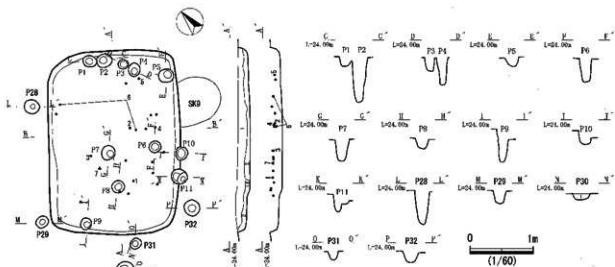
第4表 S13 出土遺物観察表

遺物 No.	種類	数量	寸法	特徴	文様	色(表面・内面)	胎土	焼成	備考
1	縄文土器	漆鉢	— (12.8)	—	口縁部片、粘着陶文、卑部に縄文を施文。	5YR6/1かぶい・黄・ 5YR6/6黄	磁鉄、白色粒、砂粒少	普通	黒点式
2	縄文土器	漆鉢	— (7.4)	—	口縁部片、ゆい凹状口縁、附加糸1種、附加糸を施文。	7.5YR7/9黄 7.5YR6/1かぶい黄	磁鉄、白色粒、透明粒	普通	黒点式
3	縄文土器	漆鉢	— (5.9)	—	口縁部片、無彫縄文を施文。	7.5YR4/1黄 5YR5/1かぶい赤褐	磁鉄、白色粒	普通	黒点式
4	縄文土器	漆鉢	— (5.7)	—	口縁部片、口縁部下に放射状に彫刻する。卑部は縄文を施文。	7.5YR4/1黄 7.5YR4/2黄褐	磁鉄、白色粒	普通	黒点式
5	縄文土器	漆鉢	— (6.4)	—	口縁部片、縁状下具による刺突文、無彫縄文を施文。	7.5YR5/4かぶい黄 5YR5/1かぶい赤褐	磁鉄、白色粒、砂粒	普通	黒点式
6	縄文土器	漆鉢	— (7.3)	—	口縁部片、沈澱による格子目文を施文。	7.5YR4/1黄 7.5YR4/1黄褐	磁鉄、白色粒、砂粒	普通	黒点式
7	縄文土器	漆鉢	— (4.4)	—	口縁部片、口縁部下に2列の凹部刺突文、筋糸文を施文、内面は格子目文の跡あり。	5YR4/6黄 2.5YR4/8黄褐	磁鉄、白色粒	やや 良好	黒点式
8	縄文土器	漆鉢	— (5.4)	—	口縁部片、口縁部下に3列の凹部刺突文、筋糸文を施文、内面は格子目文の跡あり。 口縁部片、口縁部下に4列の凹部刺突文、筋糸文を施文、内面は格子目文の跡あり。 口縁部片、口縁部下に4列の凹部刺突文、筋糸文を施文、内面は格子目文の跡あり。	7.5YR6/4かぶい黄 10YR6/4黄褐	磁鉄多、白色粒	良好	黒点式
9	縄文土器	漆鉢	(10.6)	(6.2)	—	7.5YR4/1黄	磁鉄、白色粒、透明粒	普通	黒点式
10	縄文土器	鉢形土器	— (6.2)	—	口縁部片、板状口縁、沈澱による格子目文を施文。	7.5YR5/4かぶい黄 5YR5/6黄褐	磁鉄、白色粒少	普通	黒点式 N.16 同・保形。
11	縄文土器	漆鉢	— (4.8)	—	口縁部片、口縁部下に半輪行管による彫刻文と透窓が施文する。卑部は縄文を施文、内面は格子目文の跡あり。	5YR5/6黄褐 5YR5/7黄	磁鉄、白色粒少	普通	黒点式
12	縄文土器	漆鉢	— (3.7)	—	口縁部片、口縁部に透窓あり、以下は彫刻を施文する。表面の滑らかさあり。	7.5YR7/9黄 7.5YR6/4かぶい黄	磁鉄、白色粒少	普通	黒点式
13	縄文土器	漆鉢	— (8.8)	—	口縁部片、形部模様の卑部刺突文と卑部刺突文を施文、内面は格子目文の跡あり。	10YR4/2黄 10YR7/4かぶい黄	磁鉄、白色粒、透明粒	やや 良好	黒点式
14	縄文土器	漆鉢	— (9.5)	—	口縁部片、沈澱による格子目文を施文。	5YR6/6黄 7.5YR5/2かぶい黄	磁鉄、白色粒	普通	黒点式
15	縄文土器	漆鉢	— (4.3)	(6.0)	口縁部片、口縁部下に透窓あり、以下は彫刻を施文。	5YR6/6黄 5YR5/6黄褐	磁鉄、白色粒少	普通	黒点式
16	縄文土器	鉢形土器	(2.9)	(7.0)	口縁部片、口縁部下に透窓あり、以下は彫刻を施文。	5YR6/6黄 5YR5/6黄褐	磁鉄、白色粒少	普通	黒点式 N.10 同・保形。
17	石器	磨製石斧	長さ:8.0、幅:7.2、厚:2.2、重さ:112.3g、石材:閃緑岩	50%存、上端鋭欠文、方角はほぼ直、全面よく研磨されている。					
18	石器	磨製石斧	長さ:4.4、幅:4.5、厚:3.8、重さ:53.7g、石材:緑色凝灰岩	20%存、刃部のみ、全面よく研磨されている。					
19	石器	磨製石斧	長さ:1.6、幅:3.7、厚:3.4、重さ:39.9g、石材:砂岩	50%存、上端鋭欠文、全面よく研磨されている。					

※単位:cm

S14 (第16-17図、第5表、図版4-8)

〔位置〕 5区 I-7グリッドに位置する。SK 9を壊す。〔形態・規模〕 他と比してやや小規模である。平面形状は長方形を呈す。規模は、南北軸で3.0m、東西軸で2.1mを測る。壁穴外となる周囲にピットがみられる (P28・29・30・31・32) が、関連性は不明瞭である。〔覆土〕 覆土は浅く含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土と褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約20cmを測る。〔床面・壁〕 床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔ピット〕 P1～11のピット11基が検出されている。P1は最大径23cm・深さ15cm、P2は最大径24cm・深さ70cm、P3は最大径16cm・深さ23cm、P4は最大径23cm・深さ45cm、P5は最大径23cm・深さ15cm、P6は最大径19cm・深さ36cm、P7は最大径23cm・深さ35cm、P8は最大径20cm・深さ15cm、P9は最大径19cm・深さ36cm、P10は最大径19cm・深さ22cm、P11は最大径25cm・深さ29cmを測る。いずれも径が小さく、配置に規則性は見出せないが、深いものも含まれる。また、P10・11は壁に掘り込まれている。単独のピットとして扱ったP28・29・30・31・32もS14を囲うように配されているようにも見受けられるが、関連するピットと断定は難しい。〔燗〕 検出されなかった。〔遺物〕 覆土中より出土した遺物は総点数で39点 (うち石器1点)、総重量で1,448gと遺構の規模もあるが少ない。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器6点、石器1点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維が含まれ、黒浜式土器と判断される。2は口唇部に面を有し、口縁部同様に刺突文が施される。4は網目状断糸文であるが、大木2a式の影響により格子目文が変容したものであろうか。5は2本1組の太く浅い沈線による格子目文である。7は半分欠失しているが磨痕ももつ敲石とみられる。これら出土遺物はS13より古相を示し、S12に近い時期とみられる。〔所見〕 本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。



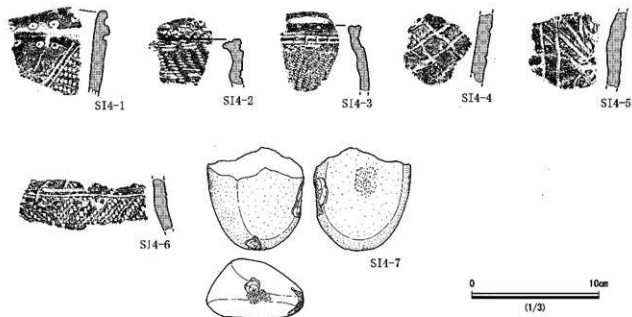
S14土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土：ローム層中量、ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR4/6 褐色土：暗褐色土混入、粘性もち、締まる。

F30土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土：ローム粒少量、粘性もち、締まる。

第16図 S14



第17図 S14出土遺物

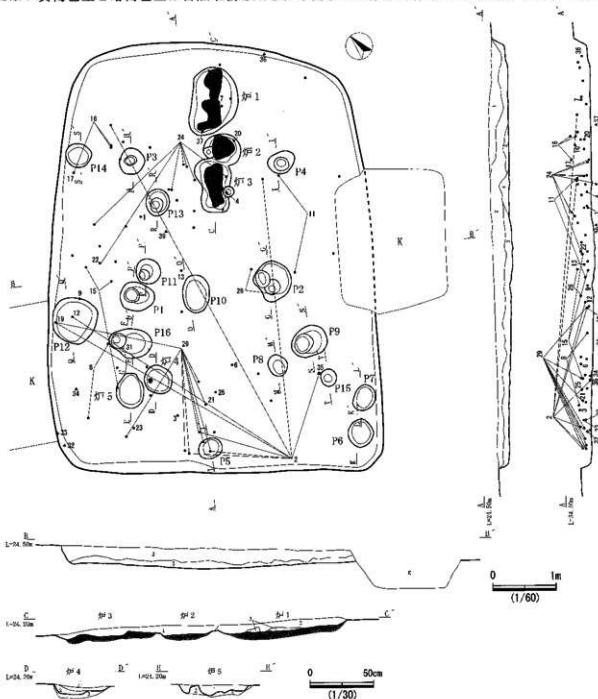
第5表 S14出土遺物観察表

遺物	品名	種類	器種	口徑	器高	厚さ	見取	説明	土層	色調(内面/外面)	土質	形状	備考
S14	1	縄文土器	深鉢	—	φ8.0	—	1) 縄文片、本器の小口縁が1線、隆起部付、内面中央部、2条1組の平行沈線で区画し、草部は縄文を施文、内面は横方向のシガキ。	7.5YR7/4に多い藍：7.5YR5/3に多い黄	縄縞、白色粒、赤褐色粒	全中良好	異様式		
	2	縄文土器	深鉢	—	φ3.0	—	口縁部片、口唇部下凹、口唇部と口縁部下に2本1組の溝状上見による斜交文が横止する。甲部は縄文を施文、内面は縦方向のシガキ。	7.5YR7/6藍：5YR8/9藍	縄縞、白色粒	普通	異様式		
	3	縄文土器	深鉢	—	φ5.1	—	1) 縄文片、1線以下に隆起、や総付管状工具による押引シガキ、草部は縄文を施文、内面は横方向のシガキ。	7.5YR4/2灰青：7.5YR6/9藍	縄縞、白色粒	普通	異様式		
	4	縄文土器	深鉢	—	φ5.0	—	1) 縄文片、横目状斜交文を施文。	5YR2/2暗赤青：7.5YR3/2暗青	縄縞、白色粒、赤褐色粒	普通	異様式		
	5	縄文土器	深鉢	—	φ5.0	—	1) 縄文片、沈線による斜子目文を施文。	10YR7/4に多い黄藍：5YR8/9藍	縄縞、白色粒	普通	異様式		
	6	縄文土器	深鉢	—	φ4.0	—	1) 縄文片、沈線が横走、草部は縄文を施文。	7.5YR3/1黒紫：7.5YR4/6藍	縄縞、白色粒、砂粒少	普通	異様式		
	7	石器	版石	—	—	—	長さ：8.1、幅7.8、厚さ4.7、重さ323.5g、石材：安山岩 30%存、断面三角形、広い扁平窪む、よく使用され、被熱している。						

●単位：cm

S15 (第18・19・20・21図、第6表、図版4・5・8・9・10)

【位置】6区F-G-8-9グリッドに位置する。【形態・規模】東側の一部が攪乱を受け失われているが、比較的遺存度は良好である。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で6.9m、東西軸で5.3mを測る。今回、検出された7軒中最も規模が大きい。【覆土】含有物の違いにより分層した4層のぶい黄褐色土と暗褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約32cmを測る。【床面・壁】床面



S15土層説明

1. 10YR4/3にぶい黄褐色土：ロームブロック多量、粘性もろ、やや締まり欠く。
2. 10YR3/3暗褐色土：ローム粒中量、炭じ粒少量、粘性もろ、やや締まり欠く。
3. 10YR3/4暗褐色土：ローム粒・ロームブロック中量、炭じ粒少量、粘性もろ、締まる。
4. 10YR3/4暗褐色土：ローム粒中量・炭じ粒少量、粘性もろ、締まる。

S15-伊1-3土層説明

1. 10YR4/3にぶい黄褐色土：粘土粒多量、粘性もろ、締まる。
2. 10YR3/3にぶい黄褐色土：炭じ粒中量、粘性もろ、やや締まり欠く。
3. 10YR3/3暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量・粘土粒多量、粘性もろ、締まる。
4. 2.5YR5/4にぶい黄褐色土：粘土土体、よく凝結している。(火灰)

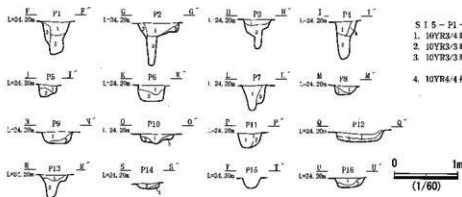
S15-伊4土層説明

1. 10YR3/3暗褐色土：粘土粒中量、粘性もろ、締まる。
2. 10YR4/3にぶい黄褐色土：凝結している、粘性欠き、締まる。
3. 10YR4/4褐色土：ローム土体、よく凝結している。

S15-伊5土層説明

1. 10YR3/3暗褐色土：ローム少量・粘土粒中量、粘性もろ、締まる。
2. 10YR4/4褐色土：ローム土体、よく凝結している。

第18図 S15①

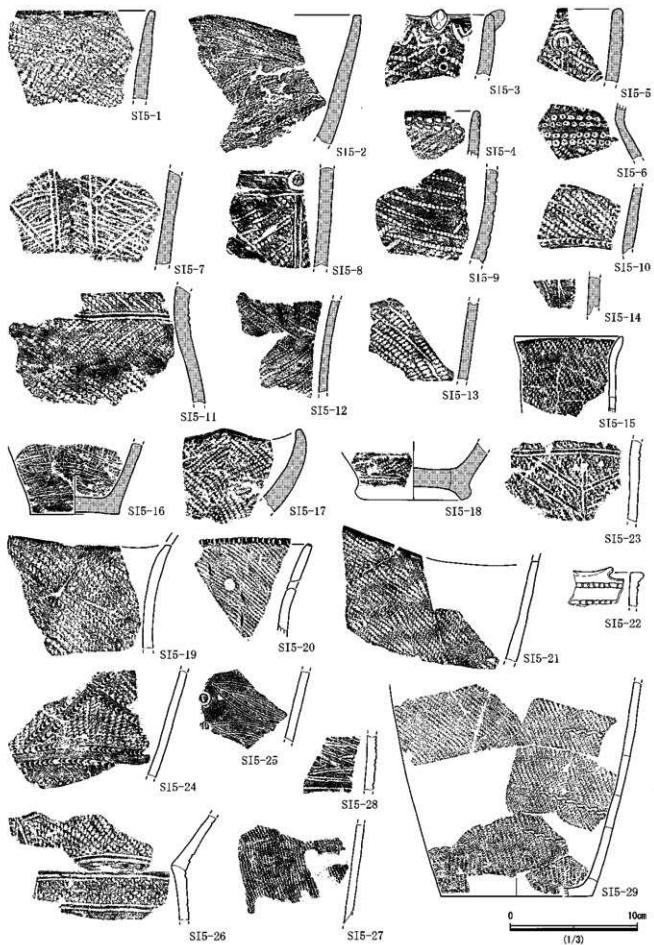


第19図 S15②

S15-P1-14-16 土層説明

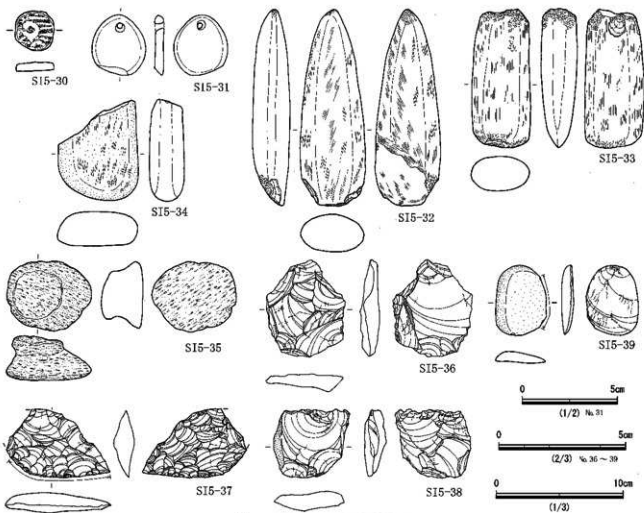
1. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量粘性もち、やや締まり欠く。
3. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
4. 10YR4/4 褐色土 ローム土主体、粘性もち、締まる。

は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。〔ピット〕P1～16のピット16基が床面より検出されている。P1は最大径54cm・深さ52cm、P2は最大径65cm・深さ67cm、P3は最大径40cm・深さ47cm、P4は最大径44cm・深さ58cm、P5は最大径39cm・深さ15cm、P6は最大径45cm・深さ26cm、P7は最大径42cm・深さ38cm、P8は最大径34cm・深さ13cm、P9は最大径58cm・深さ18cm、P10は最大径60cm・深さ15cm、P11は最大径41cm・深さ11cm、P12は最大径72cm・深さ15cm、P13は最大径44cm・深さ46cm、P14は最大径42cm・深さ10cm、P15は最大径28cm・深さ16cm、P16は最大径70cm・深さ75cmでテラス部分は15cmを測る。P1・2・3・4は形状・規模、配置状況より主柱穴と想定される。P7・13・16も柱穴とみられるが補助的なものか。あるいは建て替えも想定される。P12は口径が開き浅く、貯蔵穴の可能性もある。〔炉〕中央より北寄りに3基が並ぶように検出された。炉1・2・3は近接して規則的に並んでおり、同時に使用されていたものとみられる。また、炉4・5も並ぶように検出されており、よく被熱しているが焼土は少ない。あるいは建て替え前に使用されていた炉である可能性も想定される。炉1の平面形状は長楕円形で最大径110cm・深さ8cm、炉2の平面形状は楕円形で最大径60cm・深さ9cmで径20cm、深さ45cmほどの小ピットを作る。炉3の平面形状は歪な長楕円形で最大径88cm・深さ7cmを測る。いずれもよく被熱した火床面を残す。炉4の平面形状は楕円形で最大径48cm・深さ6cm、炉5の平面形状は楕円形で最大径56cm・深さ8cmを測る。炉1・2・3に比して炉4・5の火床面の遺存度はわるい。〔遺物〕覆土中より出土した遺物は総点数で295点（うち土製品1点・石器10点・石製品1点）、総重量で8,855gと比較的まとまった量が出土している。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器29点、土製品1点、石器8点、石製品1点を図示した。S15の縄文土器には繊維土器と無繊維土器の両者が含まれ共伴している。図示した1～14・16には胎土に繊維が含まれ、15・19～29には胎土に繊維が含まれていなかった。無繊維土器は全体で47点出土し、そのほとんどが諸磯a式古段階とみられ約17%を占める。1～18には羽状縄文、円形竹管文、菱形構成をとる燃糸文、爪形文による米字文など黒浜式新段階の諸特徴がみられる。19～29はいずれも堅緻であり、20・27の緻密な縄文、24の対角線状の爪形文間の磨消縄文、23・25の黒浜式より引き継がれた肋骨文など諸磯a式古段階の諸特徴がみられる。次に前述のように石材が乏しい地域下でS15からは多くの石器・石製品が検出された。P16からは31の石製垂飾、炉1からは黒曜石製の石匙とみられる石器が出土したほか、32の乳棒状磨製石斧や35の特徴的な石冠状の浮子など豊富な石器類が出土している。出土遺物の平面分布は全体的に散在しており、偏重は認められない。〔所見〕本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式新段階から諸磯a式古段階の過渡的な時期の所産と考えられる。



第20圖 SI5出土遺物①





第21図 S15出土遺物②

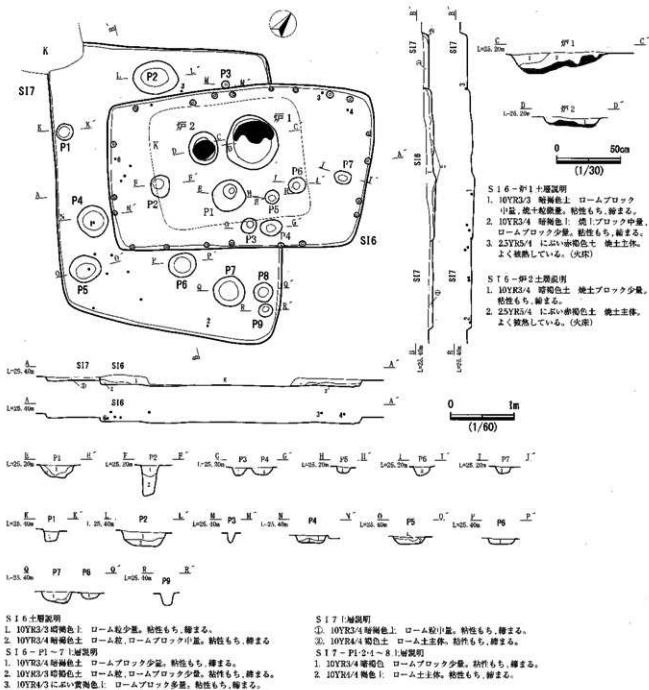
第6表 S15出土遺物観察表

遺物No.	形状	素材	口径	高さ	底径	文様	色澤(外面:内面)	胎土	焼成	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(7.1)	—	口縁部片, 羽状構成の平胎印 縄文と半磨石縄文を施文。	7.5V34/2底面: 7.5V35/3(2.5)~4 7.5V36/3(2.5)~4 7.5V37/4(2.5)~4	繊維, 白色粒, 砂粒少	普通	黒灰式
2	縄文土器	深鉢	—	(10.2)	—	口縁部片, 羽状構成を6.8cm1単位の磨石文と8cmを施文。内面は横方向のミガキ。	7.5V38/3(2.5)~4 7.5V39/4(2.5)~4 7.5V40/3(2.5)~4	繊維, 白色粒	普通	黒灰式
3	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	口縁部片, ゆるい波状口縁, 小突起を付し, 網状野原形竹管文, 磨石文を施文。	10V35/3(2.5)~4 7.5V36/3(2.5)~4 7.5V37/3(2.5)~4	繊維, 白色粒微	普通	黒灰式
4	縄文土器	深鉢	—	(3.9)	—	口縁部片, 口縁直下に2列の平片状, 半磨石縄文を施文。	7.5V35/3(2.5)~4 7.5V36/3(2.5)~4 7.5V37/3(2.5)~4	繊維, 白色粒, 透明粒微	普通	黒灰式
5	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	口縁部片, 口縁直下に3~4列の刷文文を施し, 磨石が横に走る。同形竹管文, 半磨石縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5V35/3(2.5)~4 7.5V36/4(2.5)~4	繊維, 白色粒微	普通	黒灰式
6	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	口縁部片, 2列直下の門形竹管文が横走る。半磨石縄文を施文。	7.5V35/6(2.5)~4 7.5V37/1(2.5)~4	繊維, 白色粒, 砂粒	普通	黒灰式
7	縄文土器	深鉢	—	(7.5)	—	口縁部片, 2条1組の平行波線による刷文。半磨石縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5V36/6(2.5)~4 7.5V38/3(2.5)~4	繊維, 白色粒, 透明粒微	普通	黒灰式
8	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	口縁部片, 半磨石竹管文と2条1組の平行波線で半字文。同形竹管文, 附加条を施文。内面は横方向のミガキ。	17.5V34/1(2.5)~4 7.5V36/4(2.5)~4	繊維, 白色粒, 砂粒少	普通	黒灰式
9	縄文土器	深鉢	—	(7.1)	—	口縁部片, 網状野原文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5V36/6(2.5)~4 7.5V37/4(2.5)~4	繊維, 白色粒, 赤褐色微	普通	黒灰式
10	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	口縁部片, 爪形文による半字文。半磨石縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5V37/4(2.5)~4 7.5V37/4(2.5)~4	繊維, 白色粒微, 砂粒少	中々良好	黒灰式
11	縄文土器	深鉢	—	(9.2)	—	口縁部片, 網状野原文と2条1組の平行波線が横走る。羽状構成の磨石縄文と半磨石縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5V35/2(2.5)~4 6V36/6(2.5)~4	繊維, 白色粒, 砂粒少	普通	黒灰式
12	縄文土器	深鉢	—	(7.2)	—	口縁部片, 網状野原文を施文。内面は横方向のミガキ。	5V36/6(2.5)~4 5V36/4(2.5)~4	繊維, 白色粒少	普通	黒灰式
13	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	口縁部片, 附加条2種, 附加条を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5V34/1(2.5)~4 7.5V35/4(2.5)~4	繊維, 白色粒, 透明粒微	普通	黒灰式
14	縄文土器	深鉢	—	(3.0)	—	口縁部片, 網状野原文を施文。内面は横方向のミガキ。	5V36/6(2.5)~4 5V36/4(2.5)~4	繊維少, 白色粒微	普通	黒灰式
15	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	口縁部片, 網状野原文を施文。内面は横方向のミガキ。	5V36/6(2.5)~4 5V36/4(2.5)~4	白色粒, 透明粒微	良好	黒灰式
16	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	6.8	口縁部片, 網状野原文を施文。内面は横方向のミガキ。	5V36/6(2.5)~4 7.5V34/2(2.5)~4	繊維, 白色粒, 砂粒少	普通	黒灰式
17	縄文土器	深鉢	—	(8.5)	—	口縁部片, ゆるい波状口縁, 磨石構成の半磨石縄文と半磨石縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	5V36/6(2.5)~4 7.5V36/2(2.5)~4	繊維, 白色粒, 砂粒	普通	黒灰式 No.19 * 製作中 * 半磨石

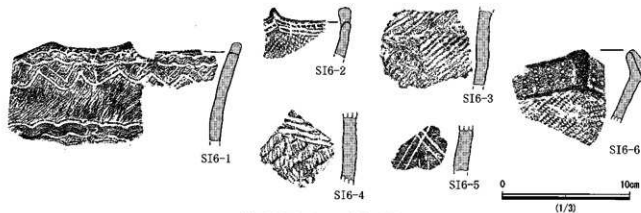
遺構: No.	種類	階層	口径	長さ	直径	文様	色層(外壁・内面)	胎土	構成	備考
18	縄文土器	西鉢	φ4.0	—	—	灰褐色片、黒褐色土織文を施文。1.7φ底。	5YR6/4(外)・5YR7/4(内)	磁器少、白色粒、砂粒	普通	黒沢式 No.17 同一個体か。
19	縄文土器	深鉢	—	φ2.0	—	— 白磁器片、黄緑(1)織。単面紅土織文を施文。内面横ナデ。	7.5YR5/2(外)・5YR7/2(内)	白色粒、砂粒	普通	黒沢式(5)式
20	縄文土器	深鉢	—	φ2.0	—	— 1線部片、口部黄褐色。穿孔あり。単面紅土織文を施文。内面縦方向のヒラヒラ織。単面横ナデ。	5YR7/6(外)・5YR7/6(内)	白色粒、砂粒	普通	黒沢式(5)式
21	縄文土器	深鉢	—	φ2.0	—	— 白磁器片。放射状口縁。単面紅土織文を施文。内面は縦方向のヒラヒラ織。	7.5YR3/1(外)・5YR7/1(内)	白色粒、黄砂	良好	黒沢式(内)式
22	縄文土器	深鉢	—	φ3.1	—	— 白磁器片。放射状口縁。2面の灰褐色が横走る。突起部や内面は丁字横ナデ。	5YR4/2(外)・5YR6/1(内)	白色粒、砂粒微	良好	黒沢式(内) 黒沢式
23	縄文土器	深鉢	—	φ6.3	—	— 銅部片。半環竹管状土具による2条1組の平行沈線が横走る。単面紅土織文を施文。	7.5YR7/6(外)・7.5YR6/6(内)	白色粒、砂粒多	普通	黒沢式(5)式
24	縄文土器	深鉢	—	φ8.4	—	— 銅部片。線部付。黒土に灰赤土を付した。斜角線を描出する。地文は単面紅土織文を施文。内面は1条半横方向のヒラヒラ織。	7.5YR7/6(外)・5YR7/4(内)	白色粒、砂粒微	良好	黒沢式(5)式 黒沢式(同一個体)
25	縄文土器	深鉢	—	φ5.5	—	— 銅部片。縦方向に円形竹管文。半環竹管状土具による2条1組の平行沈線が横走る。内面は1条半横方向のヒラヒラ織。	7.5YR4/2(外)・5YR4/6(内)	白色粒、砂粒少	良好	黒沢式(5)式
26	縄文土器	深鉢	—	φ8.4	—	— 銅部片。線部付。半環竹管状土具による2条1組の平行沈線が横走る。単面紅土織文を施文。内面は縦方向のヒラヒラ織。	5YR6/6(外)・5YR5/6(内)	白色粒、砂粒、黄砂微	普通	黒沢式(5)式
27	縄文土器	深鉢	—	φ7.8	—	— 銅部片。線部付。半環竹管状土具による2条1組の平行沈線が横走る。内面は縦方向のヒラヒラ織。	7.5YR5/2(外)・7.5YR6/2(内)	白色粒、砂粒	普通	黒沢式(5)式
28	縄文土器	深鉢	—	φ4.3	—	— 銅部片。半環竹管状土具による2条1組の平行沈線が横走る。内面は縦方向のヒラヒラ織。	7.5YR7/6(外)・7.5YR5/2(内)	白色粒、砂粒	普通	黒沢式(5)式
29	縄文土器	深鉢	—	φ16.8	φ11.0	銅へ凸部片。9字状筋文。単面紅土織文を施文。内面は横ナデ。	5YR5/6(外)・5YR3/2(内)	白色粒、砂粒少	中等	黒沢式(5)式
30	土器	土製土器	長さ:3.2、幅3.1、厚3.7、重さ:8.1g	—	—	— 灰褐色片。半環竹管状土具による2条1組の平行沈線が横走る。	5YR3/2(外)・5YR3/2(内)	磁器少、白色粒、砂粒	普通	
31	石製品	磨石	長さ:18.00、幅2.85、厚0.45、重さ:3.5g	—	—	— 石材:黒色硬質。1面は平面。両面より穴径4mm。表面は褐色(5YR7/6)で、何れも研磨されている。可塑性がある。				
32	石製品	磨石	長さ:15.6、幅2.1、厚さ:2.83、重さ:2.47g	—	—	— 石材:緑色硬質。90%存。丸棒状磨石。方角欠欠。全面よく研磨されている。				
33	石製品	磨石	長さ:11.0、幅1.6、厚さ:2.8、重さ:2.01g	—	—	— 石材:緑色硬質。80%存。丸棒状磨石。方角欠欠。全面よく研磨されている。				
34	石製品	磨石	長さ:17.5、幅6.2、厚2.8、重さ:21.0g	—	—	— 石材:黒色硬質。30%存。表面はよく使用されている。				
35	石製品	磨石	長さ:3.5、幅0.7、厚さ:0.8、重さ:1.6g	—	—	— 石材:硬質。1面は平面。石沢状。				
36	石製品	磨石	長さ:3.9、幅0.15、厚さ:0.8、重さ:0.9g	—	—	— 石材:硬質。1面は平面。石沢状。				
37	石製品	磨石	長さ:2.7、幅0.15、厚さ:0.8、重さ:0.7g	—	—	— 石材:硬質。1面は平面。石沢状。				
38	石製品	磨石	長さ:2.7、幅0.3、厚さ:0.8、重さ:1.5g	—	—	— 石材:硬質。1面は平面。石沢状。				
39	石製品	磨石	長さ:2.8、幅0.5、厚さ:0.8、重さ:2.5g	—	—	— 石材:硬質。1面は平面。石沢状。				

## SIG (第22・23図、第7表、図版5-6-10)

【位置】7区D-8-9グリッドに位置する。S I 7を壊し構築されている。【形態・規模】中央部の覆土の一部がわずかに攪乱を受けている。掘り込みは浅い。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で2.6m、東西軸で4.2mを測る。【覆土】前述のように覆土は浅く含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約15cmを測る。【床面・壁】床面は全体的にやや硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。【ピット】P1～7のピット7基と21基の壁際の小ピットが全周する。いずれも床面より検出されている。P1は最大径54cm・深さ19cm、P2は最大径35cm・深さ48cm、P3は最大径27cm・深さ12cm、P4は最大径35cm・深さ12cm、P5は最大径22cm・深さ8cm、P6は最大径27cm・深さ12cm、P7は最大径28cm・深さ10cmを測る。P2以外はいずれも浅く、支柱穴と想定されるような規則的な配置を示すピットはみられない。壁際に掘り込まれ全周するように配置された21基の小ピットはいずれも径が8cm前後、深さが5～12cmである。あるいは壁立ちの簡易的な上屋構造も想定される。【炉】中央に2基を検出した。炉1の平面形状はほぼ円形で最大径87cm・深さ14cmを測り、よく被熱した火床面を残す。建物の規模に比して大きい炉である。炉2の平面形状は楕円形で最大径52cm・深さ5cmを測り、わずかな火床面を残し、上部を削平されている可能性もあり、S I 7に伴う炉であった可能性もある。【遺物】覆土中より出土した遺物は総点数で37点、総重量で845gと少なく、石器は出土していない。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器6点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維を含み、黒沢式土器と判断される。1は2本1組の沈線によるコンパス文・波状文、5も格子目文を描出する。内面に丁寧な横磨きが施されたものが多い。これらの出土遺物は新相を示す。重複関係よりS I 7より新しいが遺物では大きな時期差は見出せない。出土遺物の平面分布は全体的に散在しており、偏重は認められない。【所見】本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒沢式中段階の所産と考えられる。



第22図 S16・S17



第23図 S16出土遺物

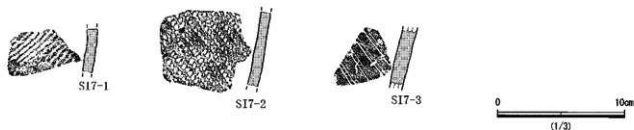
第7表 S I 6出土遺物観察表

遺物 No.	種類	形状	口径	総高	底径	文様	色調(外面・内面)	胎土	構成	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(7.7)	—	口縁部片、2山1組の波状口縁。コンバス文と2本1組の平行沈線による波状文が嵌合する。基部に縄文を施文。	7.5YR6/6橙 7.5YR6/9橙	織織、白色粒、砂粒	やや良好	黒浜式
2	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	口縁部片。波状口縁で底部部に突設。11輪山下に半截竹管状工具による2本1組の平行沈線文。基部に縄文を施文。内面は横方向の7本筋。	7.5YR5/4紅・赤黄橙 7.5YR7/1紅・赤黄橙	織織、白色粒	やや良好	黒浜式
3	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	胴部片。無筋に縄文を施文。内面は横方向の6本筋。	10YR6/1紅・赤黄橙 10YR7/1紅・赤黄橙	織織、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
4	縄文土器	深鉢	—	(7.7)	—	胴部片。無筋に縄文を施文。	7.5YR3/1黒黄橙 7.5YR4/3橙	織織、白色粒微	普通	黒浜式
5	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	胴部片。2本1組の平行沈線による格ノ目文。	5YR5/6黄橙 5YR6/9橙	織織、白色粒微	普通	黒浜式
6	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	口縁部片。波状口縁で底部部に胎付突起が直下。11輪部を接合により区画し、3本1組の刺突文を施らす。基部に縄文を施文。内面は横方向の7本筋。	7.5YR5/2紅・赤黄橙 5YR6/9橙	織織、白色粒、砂粒	普通	黒浜式

\* 960.0mm

S I 7 (第22・24図、第8表、図版5-6・11)

【位置】7区D-8-9グリッドに位置する。S I 6に壊される。【形態・規模】中央部がS I 6により大きく失われている。掘り込みは浅い。平面形状はやや歪な長方形を呈す。規模は、南北軸で4.5 m、東西軸で3.6 mを測る。【覆土】前述のように覆土は浅く含有物の違いにより分層した2層の暗褐色土と褐色土は自然堆積を呈し、床面までの深さは約8cmを測る。【床面・壁】床面は全体的にわずかに硬化している。周溝は検出されていない。壁は緩やかに立ち上がる。【ピット】P1～9のピット9基が床面より検出されている。P1は最大径28cm・深さ15cm、P2は最大径73cm・深さ22cm、P3は最大径12cm・深さ16cm、P4は最大径50cm・深さ13cm、P5は最大径50cm・深さ11cm、P6は最大径44cm・深さ7cm、P7は最大径50cm・深さ18cm、P8は最大径30cm・深さ9cm、P9は最大径22cm・深さ19cmを測る。いずれも浅く、柱穴と想定されるような規則的な配置を示すピットはみられない。【炉】検出されていないが前述のようにS I 6の炉2がS I 7に伴う炉である可能性もある。【遺物】覆土中より出土した遺物は総点数で24点、総重量で545 gと少なく、石器は出土していない。土器はいずれも細片であるが、そのうち縄文土器3点を図示した。縄文土器の全てが胎土に繊維を含み、黒浜式土器と判断される。1は無節縄文、2は単節縄文、3は半截竹管状工具による2本1組の平行沈線による肋骨文が施文される。重複関係よりS I 6より古い遺物では大きな時期差は見出せない。出土遺物の平面分布は散在しており、偏重は認められない。【所見】本遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式中段階の所産と考えられる。



第24図 S I 7出土遺物

第8表 S I 7出土遺物観察表

遺物 No.	種類	形状	口径	総高	底径	文様	色調(外面・内面)	胎土	構成	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	胴部片。無筋に縄文を施文。	5YR5/6黄赤橙 7.5YR3/1黒黄橙	織織、白色粒	普通	黒浜式
2	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	胴部片。単節縄文を施文。	7.5YR1/9黄橙 7.5YR6/9橙	織織、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式
3	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	胴部片。半截竹管状工具による2本1組の平行沈線による肋骨文。	10YR4/2灰黄橙 10YR7/3紅・赤黄橙	織織、白色粒	普通	黒浜式

\* 960.0mm

### 第3節 土坑

今回の調査では、縄文時代の土坑13基を検出している。そのうち7基SK1～7は形状から陥し穴と判断した。出土遺物は13基中9基から合計28点の縄文土器が出土した。出土した土器はそのほとんどが細片であるが繊維土器で、住居跡と同時期の縄文時代前期中葉黒浜式土器で占められている。SK3・6・7の陥し穴の覆土中からも黒浜式土器が出土している。出土遺物より判断すれば陥し穴は前期中葉黒浜式期の所産と判断されるが、前期には集落域となっており、隣接する他地点では早期後半の住居・炉穴が検出されていることから早期後半を含めて、早期後半～前期の範囲と想定したい。また後述する第3章にてさらなる検討を加える。陥し穴の主軸方向は斜面に対し直交するように配されている。SK1・4・5は平面形状が類似する。

#### SK1 (第25図、図版6)

【位置】1区G-2グリッドに位置する。一部が調査区外となるため調査区を拡張した。【規模と形状】平面が隅丸長方形を呈す。規模は、長軸1.64m、短軸0.89m、深さ1.03m、主軸方向はN-52°-Wを測る。底部には平坦面を持ち、ピットはみられなかった。【覆土】覆土は5層に分層され、上層は暗褐色土が主体を為し、下層はローム粒・ブロックが混じる。自然堆積と考えられる。【遺物】遺物は出土していない。【所見】遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構・遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。

#### SK2 (第25図、図版6)

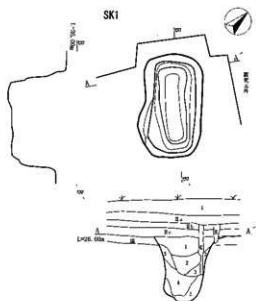
【位置】2区E-F-3グリッドに位置する。北側2/3が攪乱を受け底面以外は失われている。【規模と形状】平面が長楕円形を呈すると想定される。規模は、残存値で長軸3.10m、短軸1.40m、深さ0.51m、主軸方向はN-23°-Wを測る。底部には平坦面を持ち、中央に浅い窪みと深さ28cmの小ピットがみられる。【覆土】覆土は暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。【遺物】遺物は出土していない。【所見】遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構・遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。

#### SK3 (第25図、図版6)

【位置】3区D-5グリッドに位置する。【規模と形状】平面が長楕円形を呈す。規模は、長軸2.30m、短軸1.33m、深さ2.02m、主軸方向はN-27°-Wを測る。底部はやや起伏を持ち、ピットはみられなかった。【覆土】覆土は黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の9層に分層され、自然堆積と考えられる。【遺物】遺物はいずれも細片であるが胎土に繊維を含む黒浜式土器が7点出土している。【所見】遺構の形状より陥し穴と判断したが、深さが2m程と際立っている。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式期の所産とみられる。

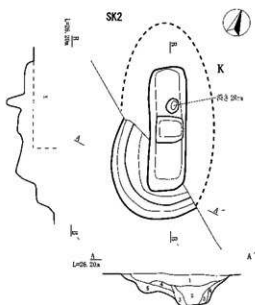
#### SK4 (第25図、図版6)

【位置】4区E-6グリッドに位置する。【規模と形状】平面が隅丸長方形を呈す。規模は、長軸1.75m、短軸1.06m、深さ0.80mを測る。主軸方向はほぼN-0°である。底部には平坦面を持ち、小ピットが2基、壁面にも小ピットが2基みられる。底面のものはいずれも浅く東側が深さ4cm、西側が深さ12cmを測る。壁面のものは東側のピットが深さ6cm、南側が深さ40cmを測る。【覆土】覆土は黒褐色土と暗褐色土と褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。【遺物】遺物は出土していない。【所見】遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構・遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。



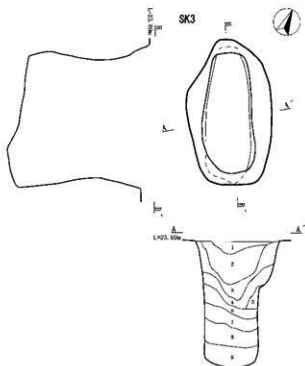
#### SK1 土層説明

1. 10R3/3 暗褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まる。
1. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物粒微量、粘性もち、締まる。
3. 10YR4/3 に近い黄褐色土 ローム粒・ロームブロック微量、粘性もち、やや締まり欠く。
4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、粘性もち、やや締まり欠く。
5. 10YR4/4 褐色土 ロームブロック多量、粘性もち、締まる。



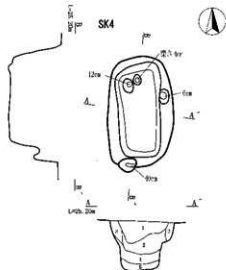
#### SK2 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒微量、ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒多量、粘性もち、締まる。
3. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、粘性もち、締まる。
4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
5. 10YR4/4 褐色土 ロームブロック多量、粘性もち、締まる。



#### SK3 土層説明

1. 10YR3/2 茶褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/2 茶褐色土 ローム粒少量、ロームブロック少量、炭化物粒微量、粘性もち、締まる。
3. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、粘性もち、締まり欠く。
4. 10YR4/4 褐色土 ローム土主体、粘性もち、締まり欠く。
5. 10YR4/4 褐色土 ロームブロック多量、粘性もち、締まる。
6. 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、やや締まり欠く。
7. 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック多量、粘性もち、締まり欠く。
8. 10YR4/3 に近い黄褐色土 ローム土主体、ロームブロック多量、粘性もち、締まる。
9. 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まり欠く。



#### SK4 土層説明

1. 10YR3/2 茶褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/2 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
3. 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
4. 10YR4/4 褐色土 ローム土主体、粘性もち、締まり欠く。
5. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まる。



第25図 SK1・2・3・4

## SK5 (第26図、図版6)

【位置】5区J-7グリッドに位置する。一部が攪乱を受け消失している。【規模と形状】平面が隅丸長方形を呈す。規模は、長軸1.39m、短軸0.88m、深さ0.98m、主軸方向はN-8°-Eを測る。底部には平坦面を持ち、ピットはみられなかった。【覆土】覆土は黒褐色土とにぶい黄褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。【遺物】遺物は出土していない。【所見】遺構の形状より陥し穴と判断した。本地点の遺構・遺物を鑑みれば縄文時代前期とみられるが、更に古い早期後半の可能性もある。

## SK6 (第26図、図版6)

【位置】7区D-10グリッドに位置する。【規模と形状】平面が長楕円形を呈する。規模は、長軸2.67m、短軸1.24m、深さ1.19m、主軸方向はN-2°-Wを測る。底部は起伏を持ち、段がみられる。【覆土】覆土は黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の5層に分層され、自然堆積と考えられる。【遺物】遺物はいずれも細片であるが胎土に繊維を含む黒浜式土器が5点出土している。【所見】遺構の形状より陥し穴と判断した。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式期の所産とみられる。

## SK7 (第26図、図版6)

【位置】7区E-10グリッドに位置する。【規模と形状】平面が楕円形を呈す。規模は、長軸1.89m、短軸1.57m、深さ2.25m、主軸方向はN-24°-Wを測る。底部にピットはみられなかった。【覆土】覆土は黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色土と褐色土の7層に分層され、自然堆積と考えられる。【遺物】遺物はいずれも細片であるが胎土に繊維を含む黒浜式土器が7点出土している。【所見】遺構の形状より陥し穴と判断したが、深さが2.2mと際立っている。出土遺物から縄文時代前期中葉黒浜式期の所産とみられる。

## SK8 (第26図)

【位置】4区F-6グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形で、断面鍋底状を呈し、テラスを有す。規模は、長軸1.27m、短軸1.02m、深さ0.34mを測る。【覆土】覆土は暗褐色土を主体とし2層に分層される。【遺物】黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。【所見】本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

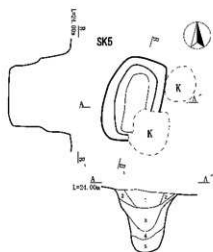
## SK9 (第26図、第9表、図版11)

【位置】5区I-7グリッドに位置する。S I 4に壊される。【形態・規模】S I 4により西側が失われている。平面は楕円形とみられ、断面鍋底状を呈す。規模は、残存値で長軸0.78m、短軸0.75m、深さ0.38mを測る。【覆土】覆土は暗褐色土を主体とし3層に分層される。【遺物】縄文土器細片がわずかに3点出土している。そのうち2点を図示した。いずれも胎土に繊維を含む黒浜式土器とみられる。【所見】本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

第9表 土坑出土遺物観察表

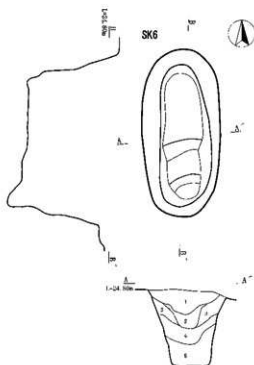
遺構No.	層別	層別	口径	形状	底性	文様	色相(外側:内面)	胎土	産地	備考
SK9	1	縄文土器	深鉢	φ5.0	-	口縁細片、鼓腹円軸文。	7.0YR6/5(外): 7.5YR4/2(内)	繊維、白色粒、砂粒	普通	黒浜式
	2	縄文土器	深鉢	φ4.3	-	口縁細片、鼓状口縁、半圓行管状工具による2本筋の半円状溝が認め、附加条1條、附加1條を施す。内面は縦方向のびり。	10YR6/4(外): 7.5YR7/4(内)	繊維、白色粒、砂粒少	普通	黒浜式

\*単位cm



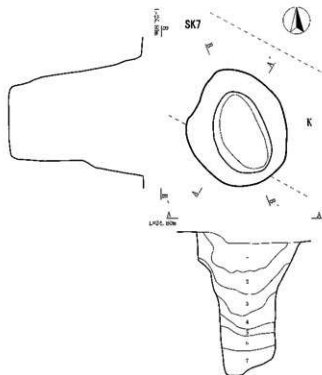
#### SK5土層説明

1. 10YR3/2 暗褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 ロームブロック中量、粘性もち、締まる。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
4. 10YR5/4 におい黄褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
5. 10YR5/4 におい黄褐色土 ロームブロック中量、粘性もち、締まり欠く。



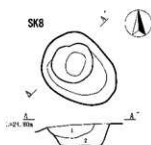
#### SK6土層説明

1. 10YR3/2 暗褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック中量、粘性もち、締まる。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 ローム粒少量、ロームブロック多量、粘性もち、締まる。
4. 10YR4/4 褐色土 ロームブロック多量、粘性もち、締まり欠く。
5. 10YR4/4 褐色土 ロームブロック土砂、粘性もち、締まり欠く。



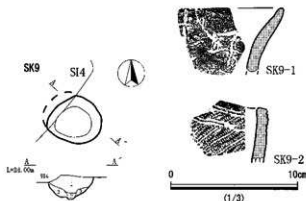
#### SK7土層説明

1. 10YR3/2 暗褐色土 ロームブロック中量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック多量、粘性もち、締まる。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、粘性もち、締まり欠く。
4. 10YR4/4 褐色土 ロームブロック土砂、粘性もち、締まり欠く。
5. 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒中量、粘性もち、締まり欠く。
6. 10YR4/4 褐色土 ロームブロック少量、粘性もち、締まり欠く。
7. 10YR5/4 におい黄褐色土 ロームブロック多量、粘性もち、締まり欠く。



#### SK8土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、ロームブロック少量、粘性もち、締まる。



#### SK9土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒中量、粘性もち、締まる。
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まり欠く。
3. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量、粘性もち、締まる。

第26図 SK5・6・7・8・9・SK9出土遺物



SK10 (第27図)

【位置】5区I-8グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形で、断面鍋底状を呈し、底面中央に小ピットが1基みられる。規模は、長軸1.02m、短軸0.70m、深さ0.18mを測る。【覆土】覆土は暗褐色土と褐色土の2層に分層される。【遺物】黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。

【所見】本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

SK11 (第27図)

【位置】5区I-8グリッドに位置する。P39を壊す。【形態・規模】平面は長楕円形で、テラスを有す。規模は、長軸1.34m、短軸0.68m、深さ0.28mを測る。【覆土】覆土は暗褐色土の2層に分層される。

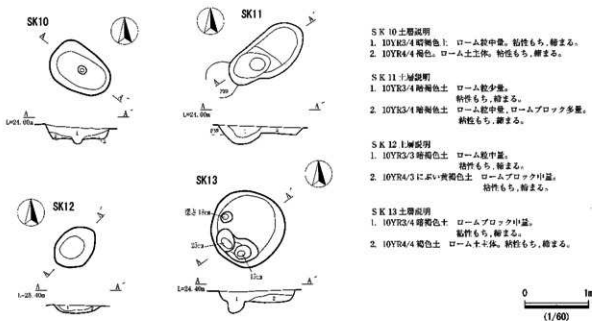
【遺物】黒浜式土器の細片がわずかに2点出土している。【所見】本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

SK12 (第27図)

【位置】7区D-9グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形で、断面皿状を呈す。規模は、長軸0.77m、短軸0.56m、深さ0.13mを測る。【覆土】覆土は暗褐色土とにぶい黄褐色土の2層に分層される。【遺物】黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。【所見】本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。

SK13 (第27図)

【位置】6区G-8グリッドに位置する。【形態・規模】平面はほぼ円形で、断面鍋底状を呈す。規模は、長軸1.21m、短軸1.18m、深さ0.18mを測る。底面に小ピットが3基みられる。南側のピットは深さ25cmと15cm、西側のピットが深さ18cmを測る。【覆土】覆土は暗褐色土と褐色土の2層に分層される。【遺物】黒浜式土器の細片がわずかに1点出土している。【所見】本遺構は、細片ではあるが出土遺物から、縄文時代中期前葉黒浜式期の所産である可能性が高い。



SK10 土層説明  
1. 10YR3/4 暗褐色土 ローム状中量。粘性もち、締まる。  
2. 10YR4/4 褐色土 ローム土主体。粘性もち、締まる。

SK11 土層説明  
1. 10YR3/4 暗褐色土 ローム軟少量。粘性もち、締まる。  
2. 10YR3/4 暗褐色土 ローム軟中量、ロームブロック少量。粘性もち、締まる。

SK12 土層説明  
1. 10YR3/3 暗褐色土 ローム軟中量。粘性もち、締まる。  
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック中量。粘性もち、締まる。

SK13 土層説明  
1. 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック少量。粘性もち、締まる。  
2. 10YR4/4 褐色土 ローム土主体。粘性もち、締まる。

第27図 SK10・11・12・13

#### 第4節 ビット (第5・6・7・8・9・28図、第10・11表、図版11)

今回の調査では、ビット62基を検出している。第11表にビットについてまとめた。P01が1区で単独で検出された他は4区～7区で検出されている。掘立柱建物跡や竪穴建物跡の痕跡となるような規則的な配置はみられなかった。ビットの覆土は暗褐色土を主体としている。P28～32についてはS I 4のところでも前述したが、S I 4に近接して周囲に配されているようにもみえるが関連性は不明である。他に確認されたビットで明らかに近・現代のものと判断されるものは攪乱としている。遺物は62基中18基から、いずれも細片ではあるが25点出土している。そのほとんどが胎土に繊維を含んでおり、住居と同時期の黒浜式土器で占められている。P08では施工時の粘土隆起がみられる土器片が1点出土しており、黒浜式古段階のものとみられる。また、P38・39・42ではそれぞれ胎土が無繊維の土器片が1点ずつ検出されている。P05で出土した黒浜式土器を1点だけが図示した。平縁口縁で、全面に無節縄文が施文されている。



第28図 P05出土遺物

第10表 ビット出土遺物観察表

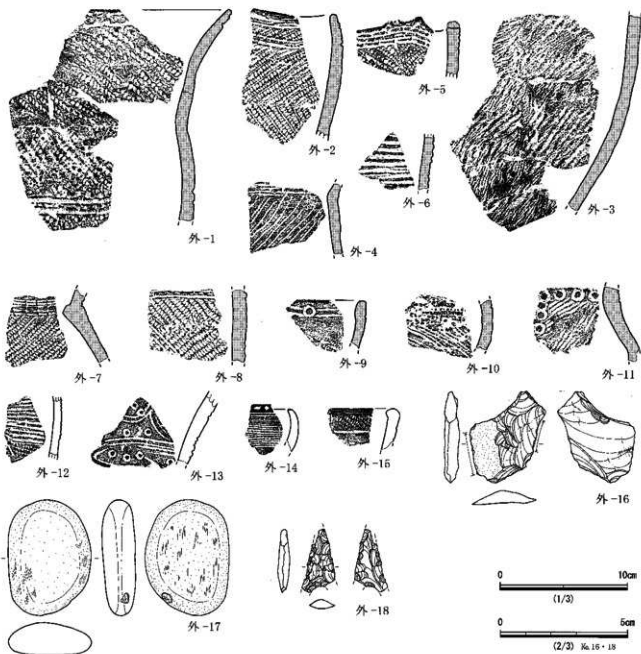
遺物名	種別	器種	口縁	器高	底径	文様	色調(外面/内面)	胎土	施文	備考
P05	1	縄文土器	深鉢	—	<4.0>	—	口縁部片、底部1割文を施文、	FR16/6中層 SY3/30赤土焼	縦線、白色粒	普通 深鉢式

第11表 ビット一覧表

遺物名	位置				備考	遺物名	位置				備考	
	グリッド	調査区	平面	深さ			グリッド	調査区	平面	深さ		
P01	G-2	1区	楕円形	65	27	P33	—	—	—	—	*本段と判別し、文豪とした。	
P02	G-8	4区	楕円形	38	42	P34	—	—	—	—	*本段と判別し、文豪とした。	
P03	G-5	4区	円形	44	16	P35	1-9	5区	楕円形	43	64	
P04	G-8	4区	円形	50	36	P36	1-8	3区	円形	20	22	
P05	G-6	4区	円形	62	22	P37	1-8	3区	楕円形	43	42	
P06	G-8	4区	円形	41	41	P38	1-8	5区	楕円形	65	47	出土式土器出土。無節縄文。
P07	G-6	4区	円形	46	18	P39	1-8	5区	楕円形	65	47	黒浜式土器出土。無節縄文。GRIに施される。
P08	G-6	4区	円形	48	19	P40	1-9	3区	楕円形	74	29	P39に隣り合う。
P09	F-7	4区	楕円形	61	69	P41	1-8	5区	楕円形	49	22	
P10	G-6	4区	円形	45	27	P42	1-7	5区	楕円形	30	30	黒浜式土器出土。無節縄文。
P11	F-6	4区	楕円形	34	31	P43	1-7	5区	楕円形	62	41	
P12	F-7	4区	楕円形	76	34	P44	1-7	5区	円形	29	27	
P13	F-7	4区	円形	39	19	P45	1-8	5区	円形	33	29	黒浜式土器出土。
P14	F-7	4区	楕円形	80	14	P46	1-8	5区	円形	34	25	黒浜式土器出土。
P15	F-6	4区	楕円形	80	10	P47	1-9	5区	円形	35	11	
P16	E-0	4区	楕円形	50	36	P48	1-8	5区	円形	30	22	
P17	J-8	5区	円形	18	25	P49	G-8	6区	楕円形	44	7	
P18	1-8	5区	円形	37	27	P50	G-8	6区	楕円形	45	37	黒浜式土器出土。
P19	1-8	5区	楕円形	40	30	P51	H-9	6区	円形	28	17	黒浜式土器出土。
P20	1-8	5区	楕円形	90	11	P52	11-9	6区	円形	33	20	
P21	1-8	5区	楕円形	65	19	P53	D-8	7区	円形	35	12	
P22	J-6	5区	楕円形	29	35	P54	D-9	7区	円形	46	22	
P23	J-7	5区	円形	30	66	P55	D-9	7区	円形	28	20	黒浜式土器出土。
P24	1-7	5区	楕円形	44	32	P56	G-9	6区	楕円形	36	33	
P25	11-1-7	3区	楕円形	55	38	P57	G-8	6区	円形	28	37	
P26	1-7	5区	円形	26	24	P58	G-8	6区	楕円形	42	53	
P27	1-7	5区	円形	25	13	P59	G-8	6区	楕円形	25	26	
P28	1-7	5区	円形	23	50	P60	D-9	7区	楕円形	42	68	
P29	1-7	5区	楕円形	30	13	P61	D-9	7区	円形	40	11	黒浜式土器出土。
P30	1-7	5区	楕円形	30	11	P62	D-9	7区	楕円形	45	29	
P31	1-7	5区	円形	18	12	P63	E-9	7区	楕円形	40	34	
P32	1-7	5区	円形	25	14	P64	F-9	7区	楕円形	39	20	

第5節 遺構外出土遺物 (第29図、第12表、図版11)

今回の調査において、表土掘削及び遺構検出中に出土した遺構外出土遺物は、364点、総重量7.717gである。そのうち18点を掲載した。表土中に含まれていた遺物はいずれも細片であり、主に検出遺構と同時期の縄文時代前期中葉黒浜式期の遺物で占められていた。わずかに後続する時期の遺物も散見される。外-12は5区で、外-13は6区で出土した諸磯a式土器の細片である。また6区のS I 5に混入したものとみられる外-14は諸磯b(新)～c(古)式土器とみられる。数点だがいずれも調査区の東側で、斜面上位の未調査部分に後続する時期の痕跡が遺存している可能性も想定される。また、外-15は縄文時代後期の曾谷式あるいは安行式土器の細片である。隣接するd地点でも該期の土器片は出土しているが遺構は未検出である。また、a地点では奈良時代の竪穴住居跡も1軒検出されているが、今回は土師器・須恵器片なども出土していない。



第29図 遺構外出土遺物

第12表 遺構外出土遺物観察表

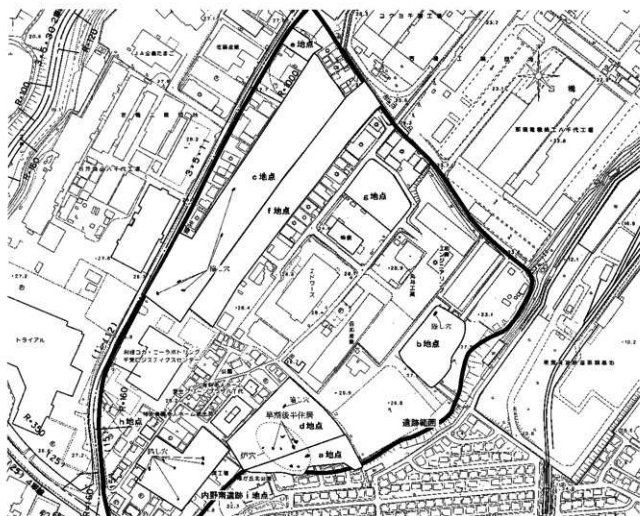
遺構No.	種類	遺体	日付	高さ	距離	文様	色調(内面・内面)	胎土	焼成	備考
1	縄文土器	深鉢	—	<16.6>	—	口縁~胴部間、11線以下にコンパス文。2本1組の平行波線が横上する。底部に縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR6/6酸; 7.5YR7/4に濃い壁	織織、白色粒少	普通	区D-97/10 区D-10 区D-11 区D-12
2	縄文土器	深鉢	—	<9.9>	—	口縁部片。深鉢11線。11線以下に半条竹管状土具による2本1組の平行波線が横上する。底部縁の附帯土1層、附帯土を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR5/4酸;5YR6/6酸	織織、白色粒	普通	区D-97/10 区D-10 区D-11 区D-12
3	縄文土器	深鉢	—	<16.3>	—	胴部片、無胎(施文)を施文。	5YR5/6酸; 7.5YR4/1酸	織織、白色粒	普通	区D-97/10 区D-10 区D-11 区D-12
4	縄文土器	深鉢	—	<5.6>	—	胴~胴部間、胴部に波線が横上。以下斜位の波線が横上される。	7.5YR7/6酸	織織、白色粒、透明粒	普通	区D-10 区D-11 区D-12
5	縄文土器	深鉢	—	<4.3>	—	口縁部片。波状口縁。波部部に2つの小突起。11線以下に半条竹管状土具による2本1組の平行波線が横上する。底部縁、縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	2.5YR5/7明赤焼; 2.5YR4/6赤焼	織織、白色粒	普通	区D-10 区D-11 区D-12
6	縄文土器	深鉢	—	<4.4>	—	胴部片。地文無胎に波線を施文。	7.5YR5/4酸;10YR7/3に濃い黄焼	織織、白色粒多	普通	区D-10 区D-11 区D-12
7	縄文土器	深鉢	—	<5.8>	—	胴~胴部間。波部に波線状土具による斜位本文が横上。以下多条縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5Y17/6酸; 5YR5/4酸;5YR5/6酸	織織、白色粒多	良好	区D-10 区D-11 区D-12
8	縄文土器	深鉢	—	<5.7>	—	胴部片。羽状構成の早稲10縄文と早稲10横上と横上斜位の2本1組の平行波線を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR7/6酸; 7.5YR5/2酸	織織、白色粒多	普通	区D-10 区D-11 区D-12
9	縄文土器	深鉢	—	<3.8>	—	11線部片。11線以下に2本1組の平行波線が横上。11線以下に半条竹管状土具による2本1組の平行波線が横上する。内面は横方向のミガキ。	5YR7/6酸; 7.5YR4/2酸	織織、白色粒多	普通	区D-10 区D-11 区D-12
10	縄文土器	深鉢	—	<3.9>	—	口縁部片。口縁部に3本の凸筋文。以下斜位の波線。内面は横方向のミガキ。	7.5YR7/6酸; 7.5YR4/2酸	織織	普通	区D-10 区D-11 区D-12
11	縄文土器	深鉢	—	<3.9>	—	胴部片。無胎(施文)を施文。胴~胴部間に19本の竹管状土具による横方向のミガキ。	5YR5/4酸;5YR6/6酸; 7.5YR6/6酸	織織、白色粒多、透明粒	普通	区D-10 区D-11 区D-12
12	縄文土器	深鉢	—	<4.9>	—	胴部片。波に波線が横上。以下早稲10縄文を施文。内面は横方向のミガキ。	5YR5/6明赤焼; 5YR5/6赤焼	白色粒多、透明粒	普通	区D-10 区D-11 区D-12
13	縄文土器	深鉢	—	<3.8>	—	胴部片。2本1組の平行波線より文様を推測し、19本の竹管状土具を施文。内面は横方向のミガキ。	7.5YR3/2酸; 10YR7/2に濃い黄焼	白色粒、透明粒、砂粒	良好	区D-10 区D-11 区D-12
14	縄文土器	深鉢	—	<3.4>	—	口縁部片。黒色沈み文。	10YR8/2酸; 10YR7/2に濃い黄焼	砂粒	良好	区D-10 区D-11 区D-12
15	縄文土器	深鉢	—	<3.2>	—	11線部片。11線部内面に波線が横上。底部に縄文を施文。	5YR5/6明赤焼; 5YR5/6赤焼	白色粒、透明粒	良好	区D-10 区D-11 区D-12
16	石器	刮片	—			長さ3.6、幅3.0、厚さ0.8。底さ0.3。素材:黒曜石 刮割。				区D-10
17	石器	刮片	—			長さ19.1、幅6.5、厚さ2.6。重さ220.6g。石好:安山岩 ほぼ方形。表面はよく使用されている。				区D-10
18	石器	石核	—			長さ2.5、幅1.3、厚さ0.4。重さ1.2g。石好:頁岩 80%程度。片割欠失。				区D-10

※単位:cm

### 第3章 まとめ

今回の調査では、縄文時代の堅穴住居跡7軒、上坑13基（そのうち陥し穴7基）、ピット62基を検出した。陥し穴を除けば、いずれも縄文時代前期中葉黒浜式期を主とした時期のものである。出土遺物の総量は、総点数で1280点、総重量で32.105gが出土した。そのほとんどが黒浜式土器で占められているが、後続する諸磯a(古)式土器が黒浜式土器に伴ってSI5からまとまって出土したほか、諸磯b(新)~c(古)式土器も細片であるものの少量だが調査区の東側を中心に出土している。また、縄文時代後期の曾谷式あるいは安行式土器の細片も出土した。今回の調査では、近隣の地点で出土している縄文時代早期後半や奈良・平安時代の遺物は検出されていない。

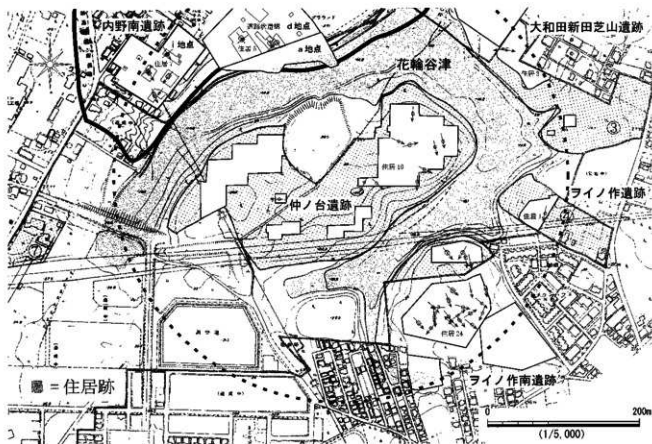
今回確認されたSK1~7の7基はその形状から縄文時代の陥し穴とみられる。SK3・6・7からは覆土中より細片ではあるが黒浜式土器が出土している。その他は遺物が検出されず時期の判断は難しい。規則的に配列されたような状況は窺えないが、いずれも斜面の傾斜に対し、長軸方向が直交するように設けられている。陥し穴については本跡より南東へ500mほどで谷を挟んで位置するライノ作南遺跡(b1地点)で15基が検出されており、分類し検討がなされている。出土遺物から楕円形よりやや丸みをもつものは黒浜式期古段階、平面隅丸長方形で平坦面をもつものは加曾利E式期、狭長な楕円形ものは黒浜式期古段階よりやや古い可能性が指摘され、時期が新しくなるにつれ、丸くなる傾向が示されている(森・玉井2000)。それに従えば、SK2・6が狭長な楕円形のものに該当し、SK2・6は早期後半~前期前半、次にSK7は楕円形よりやや丸みをもつものに該当し、SK3は狭長な傾向を残すものとみれば、ややSK7より古いとみられ、SK3・7は前期後半。SK1・4・5は隅丸長方形で平坦面をもつものに該当し、SK1・4・5は中期とおおよそ以上のような時期が想定される。SK3・6・7から出土した黒浜式土器についてもこの時期線と齟齬はないものとみられる。



第30図 縄文時代陥し穴分布図

内野南遺跡では他にも本地点の北東側のd地点で1基、b地点で1基、北側のc地点で5基、本地点の7基を含め、計14基の陥し穴が検出されている(第30図)。他地点の陥し穴も遺物の出土がないものが多く、時期判断が難しい。しかしながら、b・d地点のものは狭長な楕円形のものに該当し、c地点の5基は1基が狭長な楕円形のもの、4基が隅丸長方形で平坦面をもつやや狭長な傾向が残るものとみられる。隣接するa・d地点では縄文時代早期後半の住居跡3軒、炉穴10基も検出されている。更に北へ300mほどの同じ台地上の別遺跡となる西内野遺跡でも8基の陥し穴が検出され1基から阿玉台I a式土器が出土している。以上を鑑みれば、これらの陥し穴は早期後半～中期まで作られ続けていた可能性が高い。早期後半～中期にかけての長きにわたり、台地上は狩猟場ともなっていた状況が窺える。台地上に散在し、等高線に対し長軸方向を直角させる陥し穴は、規則的に配列されたような追い込み環に使用された状況ではなく、獲物の通り道、いわゆる「ケモノ道」に配置された定型的な罠である可能性が想定される。

次いで縄文時代前期中葉黒浜式期を主とした竪穴住居跡7軒を検出している。これらは出土遺物から判断して、SI1が黒浜式古～中段階、SI2・4がSI1よりやや新相を示し中段階、さらにSI3・6・7が後続するも中段階の範疇とみられる。そしてSI5が黒浜式新段階から諸畿a式古段階にかけての移行期であった。黒浜式期をとおして断続的に集落が営まれていた状況が窺える。他地点も加味すれば、隣接するd地点で黒浜式期(古段階)の住居跡1軒・道路状遺構1条、浮島式期の住居跡2軒、興津式期の住居跡2軒が検出されている。内野南遺跡では前期の住居跡が検出されているのは、これ



第31図 縄文時代前期中葉～後葉遺構分布図

までのところ南端部の花輪谷津最奥部に面した台地の縁辺部に限られており、計12軒となる(第31図)。更に周辺遺跡もあわせてみると、第1章第4節でも前述したが、本跡を含む花輪谷津の最奥部には谷の先端部を取り囲むように近接して、仲ノ台遺跡、ライノ作遺跡、ライノ作南遺跡、大和田新田芝山遺跡が展開しており、前期の遺跡が確認されている。仲ノ台遺跡では黒浜式期(古～中段階)の住居跡10軒と浮島式期の小竪穴状遺構1基、ライノ作遺跡では黒浜式期(古段階)の住居跡1軒、ライノ作南遺跡では黒浜式期(中～新段階)の住居跡24軒、大和田新田芝山遺跡では黒浜式期(古～中段階)の住居跡3軒が検出されている(森・玉井2000)。第31図の破線の円は径600m、この範囲内に谷を挟み、縄文時代前期の住居跡50軒、黒浜式期に限れば住居跡46軒が分布している。同時並存であれば谷向いに見える距離に対峙するように存在し、関連性が深いことは容易に想定される。活況を呈した黒浜式期とは相反して、後続する浮島・興津式期には大幅に住居数を減らしている。

本跡を含む古奥東京湾岸は石器の材料となる石材が乏しい環境にあり、石材は遠隔地より運ばれてきたものが多くを占めていた。こうした環境下の縄文時代前期中～後葉には、石器・石材は希少であり、それらを多く保有する集落は「広場集落」(環状集落:中核的な集落)を形成することが多くみられる。一方でそうした石器類が僅少な集落は「非広場集落」(非環状集落:一般的な集落)であるといった状況が指摘されている。また、「広場集落」と「非広場集落」間では儀礼執行や石材保有など様々な面で階層構造が醸成され、中核的な集落では石器・石材などの交易センターとして役割を担うといった機能も想定されている(小川2001)。前代の岡山式期に比して黒浜式期には人口増加にあわせ、中核的な集落との関係を維持しながら、一般的な小規模集落が増える傾向にあった。

今回の調査でも出土した石器は欠損品が多く、修復しながら大切に使用されていた状況が窺える。また、S15から出土した乳棒状磨製石斧は、壁際に並べるように出土している(図版4)。本来伐

採具である乳棒状磨製石斧は、貴重な石材を遠隔地より入手し、時間と労力を掛け加工した希少財となり、斧としての機能以上の意味が附加され、余剰品々富としての側面も持っていた。SI5はやや規模も大きく、出土遺物も多く、石器類も比較的豊富であった。希少財でもある乳棒状磨製石斧や石製垂飾なども保有しており、一定程度の余剰の蓄積を持った居住集団(々家族)が住していたとみられる。

内野南遺跡の集落は断続的に前期をとおして営まれ、黒浜式古段階には開始されている。更にその関連性を別とすれば早期後半にまで遡り、近接する他の4遺跡よりも古い集落となる。しかしながら、その規模は小さく、一時期に存在した住居は1~2軒、あるいは未調査部分も含めても数軒程度とみられる。中核的な集落と儀礼への参加などで関係性を保ちながら、そこを介して石器・石材を入手していた可能性が想定される一般的な集落の一つと判断される。

第31図の各住居跡に付した矢印は住居の主軸方向と炉跡より推測した出入り口の開口部の方向を示している。内野南遺跡では出入り口がおよそ谷へ向っている傾向が窺える。他の遺跡でも台地の縁辺部では谷を向く傾向がみられる。一方で台地上にまとまった住居群を形成するライノ作南遺跡をみると主軸方向や出入り口に中心広場を意識したような環状構造はみられず、出入り口が南方向を中心に向くといった状況である。その南側で住居は検出されておらず広場自体が存在しない。住居の居住性を重視して南方向を向いているといった状況とみられる。環状集落は形成されなかったが黒浜式期の中~新段階にかけ24軒もの住居が集中し、地点貝層も検出されている。貝類の入手先について、花輪谷津の最奥部からでは印磨湾側で最も海進が進行した時期の海岸線でも新川中流域の宮内橋付近が想定されており、北東方向へ直線で約3km離れている。また、東京湾側では現在程ではないが更に距離があった。離れた海から運び込まれた貝類は儀礼行為に使用され、「モノ送り」のような儀礼の痕跡として地点貝層が残されたとする指摘もある。こうした儀礼行為などもある程度の中核的な性格を有していた可能性を示唆するものとみれば、やはりライノ作南遺跡の集落が花輪谷津の最奥部の中核的な集落と想定される。

今回の調査で検出された集落は、単独ではその性格を判断しかねるため、他地点、更には関連性が想定される周辺遺跡までも含め検討を試みた。本跡を含む花輪谷津最奥部の縄文時代前期中葉黒浜式期の様相の一端が明らかとなる調査となった。開発が目覚ましい八千代緑が丘駅周辺であることから今後も調査が積み重ねられ、該期の様相がより明らかとなるよう更新されていくことが望まれる。

【参考文献】

朝比奈勇・森電誠・中野修秀	2008	『千葉県八千代市ライノ作南遺跡と地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
今村吉男	1983	『臨穴(おとし穴)』『縄文文化の研究』2集 雄山閣
小川浩人	2001	『縄文時代の生態と農耕—内裏系京浜沿岸の社会—』アム・プロモーション
長野友生	1989	『黒浜式土器の系統性とその変遷』『土曜考古』第13号 土曜考古学会
菅原弘通	2006	『筑城山立野史館展示室 筑城の縄文土器』筑城山立野史館
岩口康浩	2005	『船政史書と縄文社会構造』学生社
千葉真	1998	『千葉県の歴史』資料編 考古3 千葉県
千葉県文化財センター/編	1990	『千葉県文化財センター—縄文文化財報告書 第176集 八千代市竹ノ台遺跡、芝山遺跡— 千葉県教育委員会/編
2007	『千葉県教育委員会/編 第561集 西八千代北部地区縄文文化財調査報告書 1』都立百生機構千葉地域文化 千葉県教育振興財団	
安倍成久	2000	『千葉県八千代市内野南遺跡』地点発掘調査報告書 八千代市遺跡調査会
早野佐和・小沼将之 松川由成ほか	2011	『野田市縄文文化財調査報告書 第43号 鹿野第2遺跡』野田市教育委員会
森電誠	2013	『千葉県市川市東新山遺跡—市川地区発掘調査報告書—』野田文化財研究所
森電誠・玉井雅弘	1996	『千葉県八千代市竹ノ台・ライノ作南遺跡と地点発掘調査報告書』八千代市西八千代遺跡調査会
森電誠・中野修秀	2000	『千葉県八千代市ライノ作南遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
2007	『千葉県八千代市西内野南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会	
2008	『千葉県八千代市内野南遺跡と地点発掘調査報告書』八千代市教育委員会	
八千代市教育委員会	1999	『内野南遺跡と地点』『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
2004	『内野南遺跡と地点』『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会	
3072	『内野南遺跡と地点』『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会	
2014	『内野南遺跡と地点』『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会	
3077	『内野南遺跡と地点』『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会	



調査区全景 南東から



1区全景 南東から



2区全景 南東から



3区全景 南東から



4区全景 北から





5区全景 北東から



6区全景 西から



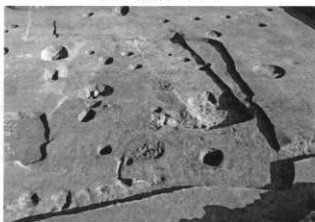
7区全景 南東から



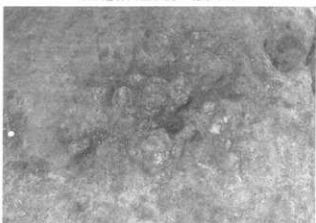
SI1 土層断面 東から



SI1 遺物出土状況 北東から



SI1 全景 北西から



SI1 炉1 全景 南東から



SI1 炉2 全景 南東から



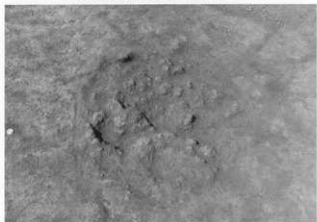
SI2 土層断面 東から



SI2 遺物出土状況 南東から



SI2 全景 南東から



SI2 炉全景 南東から



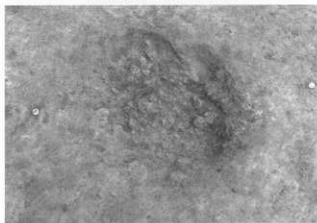
SI3 土層断面 南東から



SI3 遺物出土状況 南から



SI3 全景 南から



SI3 炉1 全景 南から

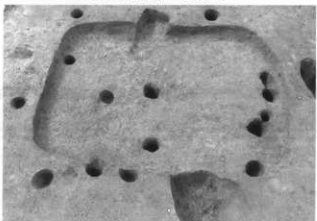
図版 4



SI4 土層断面 北東から



SI4 遺物出土状況 東から



SI4 全景 東から



SI5 土層断面 東から



SI5 遺物出土状況 北東から



SI5 磨製石斧出土状況 南西から

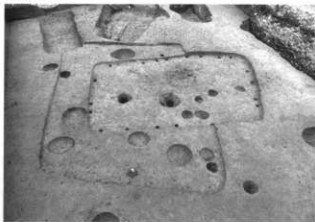


SI5-P16 石製垂飾出土状況 南東から



SI5 全景 北東から

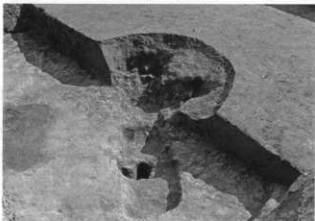
図版 6



SI6.7 全景 南東から



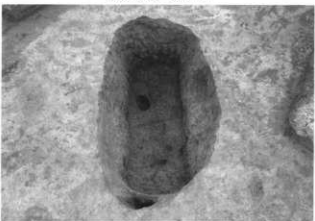
SK1 全景 南東から



SK2 全景 北から



SK3 全景 北から



SK4 全景 南から



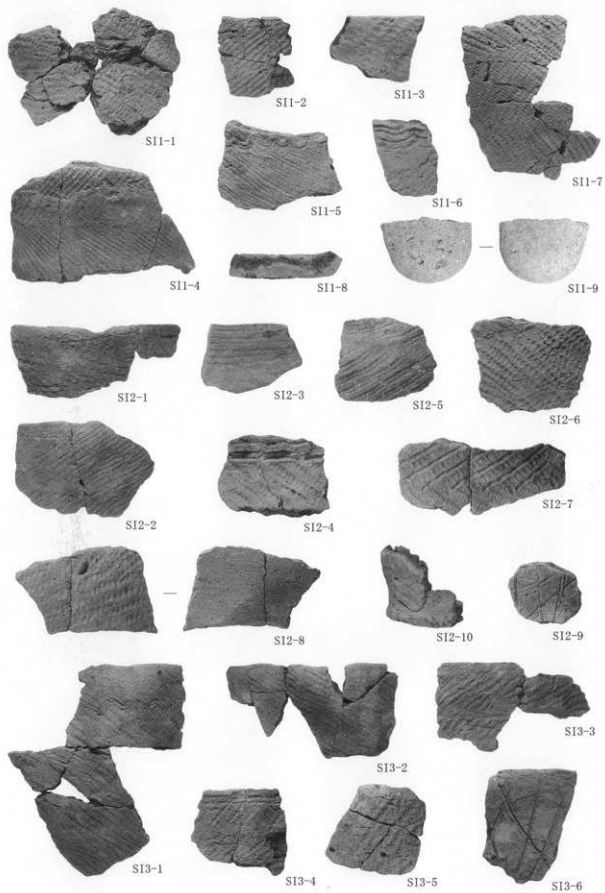
SK5 全景 南から



SK6 全景 南から



SK7 全景 南から



S11・2・3 ①出土遺物



SI3-7



SI3-8



SI3-9



SI3-10



SI3-11



SI3-12



SI3-13



SI3-14



SI3-15



SI3-18



SI3-17



SI3-16



SI3-19



SI4-1



SI4-2



SI4-3



SI4-4



SI4-5



SI4-6



SI4-7



SI5-1



SI5-2



SI5-3



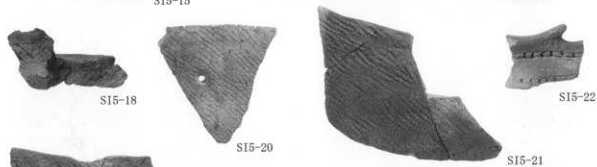
SI5-4



SI5-5

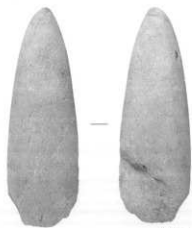


SI5-6





S15-29



S15-32



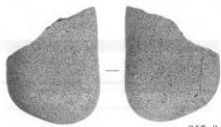
S15-30



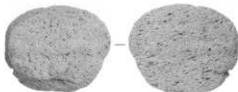
S15-31



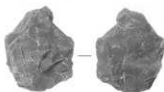
S15-33



S15-34



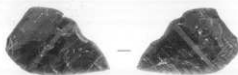
S15-35



S15-36



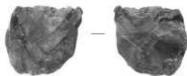
S15-39



S15-37



S16-1



S15-38



S16-2



S16-3



S16-4

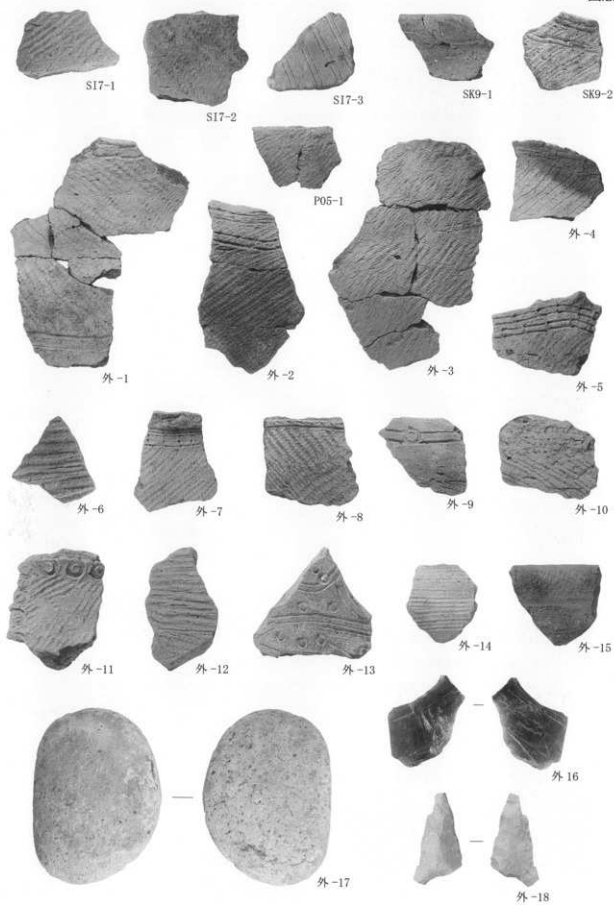


S16-5



S16-6





S17,SK9,P05,遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	うちのみなみいせき あいちてん はつつちょうさほうこくしょ							
番 名	内野南遺跡 i 地点発掘調査報告書							
副 書 名	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査							
編 著 者 名	大橋 生 八千代市教育委員会							
編 集 機 関	株式会社 地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森 2596-9							
発 行 機 関	三信住建株式会社 / 八千代市教育委員会 / 株式会社 地域文化財研究所							
発 行 年 月 日	西暦 2017 年 10 月 30 日 (平成 29 年)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内野南遺跡 i 地点	千葉県八千代市 吉橋字内野 1063-3 ほか	122221	289	35° 43' 55"	140° 04' 29"	2017.02.20 ～ 2017.04.06	1.070 ㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内野南遺跡 i 地点	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 7 軒 土坑 13 基 (陥し穴 7 基) ピット 62 基		縄文土器：深鉢・鉢形土器 土製品：土製円盤 石器：石鎌・磨製石斧・ 打製石斧・磨石・敲石 浮子・剥片 石製品：垂飾		SI5 は、縄文時代前期中葉黒浜式新段階から諸磯 a 式古段階にかけての過渡期にあたり、両型式が共存して出土している。	
要 約	縄文時代の竪穴住居跡 7 軒、土坑 13 基、ピット 62 基を確認した。縄文時代前期中葉黒浜式期を中心とした集落跡である。住居跡は黒浜式古段階から黒浜式新段階・諸磯 a 式古段階にかけての黒浜式期の各段階にみられる。また、陥し穴は 7 基検出されており、SK3・SK7 は深さが 2m 以上に及ぶ。縄文時代に台地上が狩猟場ともなっていたことが窺える。							

千葉県八千代市

内野南遺跡 i 地点発掘調査報告書

-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

平成 29(2017)年 10 月 30 日 発行

編 集 株式会社 地域文化財研究所

発 行 三信住建株式会社  
八千代市教育委員会  
株式会社 地域文化財研究所

印 刷 能登印刷株式会社